

ISSN 2432-5104

スポーツ科学研究

Journal of Sports Sciences

第8集 令和6年3月



日本大学スポーツ科学部
スポーツ科学研究所

目次

〔巻頭言〕

益子 俊志…スポーツ科学の発展と期待される未来…………… 3

〔専門科目分野〕

〔実践報告〕

原 怜来…世界水泳選手権2023 福岡大会・世界マスターズ水泳選手権2023 九州大会報告…………… 7

〔総合科目分野〕

〔総説〕

清水 享…彝族の諺である「ルビ」収集資料について……………15

〔原著論文〕

桶田 由衣…John Miltonの*Of Education*におけるキリスト教的体育思想（前・後）……………23

〔実践報告〕

秋葉 倫史…令和4年度海外派遣研究員（短期B）報告：フィリピンの英語教育に関する調査……………33

田中 竹史…令和4年度海外派遣研究員（短期B）報告：
生成理論に基づくヒトの言語獲得・言語習得に関する研究……………39

2023年度 組織名簿一覧……………47

2023年度 研究活動実施報告……………49

執筆要領……………66

編集後記

スポーツ科学の発展と期待される未来

益子 俊志^a

スポーツ科学は、人間の身体的・精神的・社会的な健康を増進するとともに、スポーツのパフォーマンスや指導方法・社会的価値など幅広い研究を行う学問分野です。本誌では、この分野の最新の研究成果や知見を広く共有することを目的としています。

令和5(2023)年、日本代表チームはラグビーワールドカップフランス大会に出場しました。前回大会でベスト8に進出した経験を生かし、グループリーグでチリ、イングランド、サモア、アルゼンチンといった世界の強豪相手に2勝2敗と互角の戦いを繰り広げました。その勇敢な戦いぶりは、日本国内や世界に対して大きな感動や勇気を与えました。また、日本代表チームが試合終了のホイッスルが鳴った後、ノーサイドの精神で、勝敗に関わらず相手チームと抱擁を交わした姿は印象的でした。このノーサイドの精神は、スポーツにおけるフェアプレーと友情を象徴しています。私は、この精神がスポーツだけでなく地域における交流や国際社会での友好関係においても重要な価値観であると考えています。このように、スポーツには人々をつなぎ、互いの理解や尊重をもたらす力があり、世界平和に貢献することができると確信しています。

また、日本代表チームの健康管理やパフォーマンス向上に貢献したスタッフや研究者に敬意と感謝の意を表したいと思います。彼らはスポーツ科学の最先端の知識や技術を駆使して、日本代表チームのサポートに尽力しました。このようなアスリートへの的確な支援

には、日々進歩するスポーツ科学研究が不可欠です。近年のスポーツ科学は、アスリートや指導者だけでなく、高齢者や児童などの幅広い世代に対しても有益な知識や情報を提供しています。例えば、運動生理学やスポーツ栄養学では、運動がもたらす効果や、適切な運動量、食事内容に関する知識を提供し、健康増進や疾病予防に貢献しています。スポーツ心理学では、モチベーションやストレス管理などの方法をアスリートに伝え、メンタルヘルスやコミュニケーション能力の向上に寄与しています。これらの研究は、スポーツ科学研究の発展だけでなく、科学全体の進歩にも貢献しています。

さらに、医学や工学、歴史学など他の分野とも連携し、横断的な研究を展開することで、新たな学術領域の発展を促すことが可能だと思います。例えば、工学分野との共同研究によって、スポーツ用具やウェアなどの開発や改良が行われ、それによってトレーニング機器・解析装置の開発へとつながります。そして結果として、バイオメカニクス研究の発展になり、スポーツ環境の整備や技術的な進歩に貢献しています。

以上のように、スポーツ科学研究は、ヒトの健康や社会福祉に貢献するだけでなく、文化や科学全体の発展にも重要な役割を果たしています。本誌で述べられたスポーツ科学の研究成果が多くの領域・分野の研究者の他、スポーツ実践者にとって、新たな研究テーマを創出させる有益な情報源となることを期待しています。

^a スポーツ科学部長・教授

専門科目分野

世界水泳選手権2023福岡大会・ 世界マスターズ水泳選手権2023九州大会報告

World Aquatics Championships - Fukuoka 2023 and World Aquatics Masters Championships - Kyushu 2023 report

原 伶来^a

Reira Hara^a

Key words: management, human resource development, host country
マネジメント, 人材育成, 自国開催

1. はじめに

世界水泳選手権は1973年から開催されており⁵⁾, 今大会は第20回目となった. 2021年6月に世界水泳連盟 (Fédération Internationale de Natation : FINA) の会長がHusain Al Musallam氏になると⁶⁾, 名称がFINAからWorld Aquatics (以下「WA」と記載)に変更され, 国際ルールも改訂されるなど, 多くの改革がおこなわれた⁷⁾. 世界水泳選手権も, これまで第何回と標記されていたものが撤廃され, 今大会も世界水泳選手権2023福岡大会 (英語表記: World Aquatics Championships - Fukuoka 2023) となった.

福岡市での開催は, 新型コロナウイルスが流行する前の2016年に決定し, 東京五輪の翌年の2021年に行われる予定であった. アジアでの世界水泳選手権が, 2001年以来20年ぶりに福岡市で開催されること, そして東京五輪から連続して国際大会が自国で開催されることに, 日本の水泳界は盛り上がった. しかし, 2020年に新型コロナウイルスが流行すると, 東京五輪も2021年に延期となり, 世界水泳選手権福岡大会は2022年5月12~29日に延期となった. さらに, 2022年開催に向け準備をしていた矢先の2022年2月に, WAは福岡大会を2023年7月に延期すると発表した⁸⁾. 発表時は各国の代表が決定している時期でもあり, また世界的にはコロナウイルスと共に生きるウィズコロ

ナ生活がスタートし, 日常を取り戻しつつあったため, 衝撃が走った. その結果, 当初の予定から約2年も遅れた2023年7月14日に開催となった.

世界マスターズ水泳選手権は, 1986年に東京で開催されると2年に一度開催されている⁴⁾. 1986年では競泳のみの実施であったが, 1990年からは現在の競泳・水球・飛込・アーティスティックスイミング (以下, 「AS」と記載)・オープンウォータースイミング (以下, 「OWS」と記載)の5種目が実施されている⁴⁾. 今大会はアジアでは1986年の東京, 2019年の韓国に続いて3大会目となり, 福岡市だけでなく, 熊本市・鹿児島市でも行われ, 3都市での開催となった. 世界水泳選手権終了後から開催される世界マスターズ水泳選手権は, 世界水泳選手権の延期を受け, 2023年8月2日からの開催となった.

筆者は今回, OWS競技における運営に携わったことから, OWS競技の運営について自らの考えを報告する. 尚, 本報告は筆者個人の考えを示したものであり, 組織を代表とするものではなく, 利益相反はない.

2. 概要

2.1. 大会テーマ

世界水泳選手権・世界マスターズ水泳選手権の大会コンセプトは「WATER MEETS THE FUTURE」で, 革新的でソーシャルな大会運営をテーマにし, 水泳の

^a 日本大学スポーツ科学部
College of Sports Sciences, Nihon University

未来を作り出す大会として、そして様々な人の繋がりにより地域の未来も作るという意味もこめて作られた³⁾。

世界水泳選手権では、競技会場と宿舎を福岡市に集約することで、選手の移動負担を軽減し、大会が盛り上がっている雰囲気を出すことで、効率的な運営をおこなった。一方で、世界マスターズ水泳選手権は、「する」「みる」「ささえる」といったスポーツの携わり方をより多くの方に知ってもらうため、また、参加することで経済波及効果を生み出せるよう3都市での開催となった。

オリンピックは競技スポーツの要素が強いものであるが、世界水泳選手権に加え、世界マスターズ水泳選手権をおこなうことで、スポーツの価値を日本に発信することができた。このことは特に長寿社会となっている我が国にとって、スポーツの在り方を再認識するいい機会になったと考える。

2.2. 期間

世界水泳選手権は、2023年7月14日(金)から7月30日(日)の17日間行われた。世界マスターズ水泳選手権は、2023年8月2日(水)から8月11日(金)の10日間で行われた。

2.3. 参加者

世界水泳選手権は191か国・地域から1万6,398人が、世界マスターズ水泳選手権では77か国から3万6,678人の選手が参加した。さらに、観客については、世界水泳選手権において、13万5,907人であった。また、ボランティア等を含めると来場者数は30万5,907人となった。世界マスターズ水泳選手権では約16万人の関係者が来場し、世界水泳選手権・世界マスターズ水泳選手権で来場者総数は46万8652人であった。また、チケットの販売額は7億1,000万円となった²⁾。

2.4. 実施種目

世界水泳選手権は、競泳・飛込・ハイダイビング・水球・AS・OWSの6種別がおこなわれ、世界マスターズ水泳選手権では競泳・飛込・水球・AS・OWSの5種別がおこなわれた。

3. 競技結果

今大会では競泳種目において10個の世界新記録が樹立された⁹⁾。東京五輪の際には、個人種目では2個、リレー種目で4個の世界新記録樹立であった¹⁾ことを考えると、競技レベルの高い大会になったといえる。

日本代表選手団の結果は、ASで金メダル4個、銀メダル1個、銅メダル2個。飛込で銅メダル1個。競泳で銅メダル2個の計10個のメダルを獲得した。国別順位では6位となった⁹⁾。前回の2022年世界水泳選手権ブダペスト大会では金メダル2個、銀メダル8個、銅メダル3個の計13個であり、わずかながら減少した。また、OWSはメダルを獲得できなかったものの、1.5km×4人混合リレーにおいて7位となり、初入賞を果たした⁹⁾(写真1)。

今大会で最もメダルを獲得した競技はASであった。競技規則が変更となり、これまでより採点の透明性が高まった形だが、芸術性よりも難易度や正確性を重要視されるルールとなった。WAのAS委員に日本人が入っていることもあり、いち早くルール改正の情報を入手し、チームもそれに合わせた練習をしていった形であろう。

4. 運営

4.1. 世界水泳選手権

4.1.1. 準備期間

新型コロナウイルス蔓延から、オンライン会議が当たり前になり、WAや世界水泳選手権実行委員会とも



写真1 OWS1.5km×4人混合リレー
(撮影日：2023年7月20日，撮影者：中條和之)



写真2 ウェアラブル端末装着している海外選手
(撮影日：2023年7月14日，撮影者：原怜来)



写真3 大雨の影響で流れ着いた流木
(撮影日：2023年7月20日，撮影者：原怜来)

頻繁に会議を行えるようになった。一方で、現場での調整は直前となり、現場にきて変更を余儀なくされる点が多くあった。

また、WAのルール変更により今年からウェアラブル端末を装着してのレース参加が承認され、初めての試みもあった。使用希望のウェアラブル端末を事前申請の上、WAが承認したもののみレースでの使用が許可された。新たな試みを試す国もあった一方で(写真2)、日本チームはウェアラブル端末の使用はしなかった。国の特徴やウェアラブル端末を扱うことのできるデータ分析スタッフが選手団に入っているかなど、国としてOWS競技への強化の力の入れ方に違いが表れたと感じた。

各国選手団の宿泊場所は、競技会場が目の前にある施設とし、また国ごとにホテルをまとめるのではなく、様々な国のOWS選手団を一つの宿舎にすることで、情報伝達も含め、運営しやすいようコントロールをした。実際に、競技会場から徒歩5分で到着する宿泊施設であったため、移動車を準備する必要もなかった。また、世界水泳選手権はOWS競技において5kmや10kmといった出場種目が異なる選手がいるため、選手によって大会日が異なり、各国の選手団の中でも選手1人ずつ動きが異なる。そのため、競技会場まで徒歩で行くことができたのは、チームとしての当日の動きを考える際に、輸送時間を気にすることなく臨機応変に対応でき、余計なストレスなく過ごせたものとする。

4.1.2. 大会期間

選手団の受け入れは7月11日より開始した。前日の大雨の影響により近くの川から流れてきた木やごみがあり、7月11日は海での公式練習が中止となり、プールでの練習に切り替えた。プールを準備していなければ、練習場所がなく混乱をきたしていたと思うが、プールを練習期間常に確保していたことから、無事公式練習を実施することができた。海の競技会場では、その後も雨が降るたびに、選手が泳いでいて危ないような木やごみが流れ着いた(写真3)が競技役員で撤去し、予定通り海での練習も実施することができた。

今回非常に悩まされたのが天気の急変であった。審判・競技役員・メディアの配置を確認する運営リハーサル中にも突如と雷雨が発生し、緊急中止となった。運営リハーサルのため、選手団はおらず競技役員だけであったが、急遽、緊急中止のシミュレーションに切り替え、安全な場所に避難させた。しかし、安全な場所の認識の統一が取れていないことが露呈し、簡易テントの下に逃げて安心している者もあり、その場で集まった人の危機管理意識をコントロールするのは非常に難しいと感じた。各国の代表選手団がいる時、つまり英語を完全に理解できない選手・スタッフもいる時に緊急中止となった際の対応を急遽検討する必要性が明らかとなり、緊急ミーティングを開き、危機管理体制の確認を行った(写真4)。天気の急変がないか常に確認するスタッフの人員を増やし、天気図を複数人で常にチェックするようにした。そのおかげで雷雨が予見でき、公式練習時間を変更することはあった

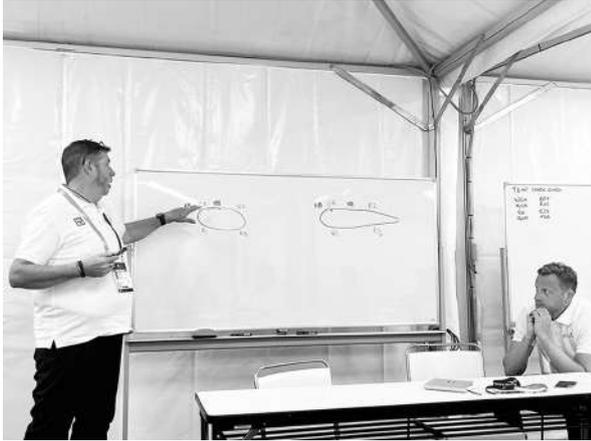


写真4 WAとのミーティングの様子
(撮影日：2023年7月14日，撮影者：原伶来)



写真5 公式練習の様子：海外コーチはSUPを使用して
コーチング
(撮影日：2023年7月14日，撮影者：原伶来)

が、レース中や公式練習中などに雷雨に見舞われず、参加者を緊急避難させることもなく終えることができた。

またコロナ禍が終わり、マスクの着用義務もなくなった中、コーチから現地にて様々な要望も頻出した。例えば、公式練習の際に選手と一緒に泳いでいいか、SUPというサーフボードのようなものを持ち出し、練習に帯同していいかなどの要望があった。その場で、WAのマネージャーと確認し、選手と同じ方法で公式練習のADチェックを行った上で海に入るのであれば問題ないとして承諾した(写真5)。さらに、コロナ禍ではコーチと選手をできるだけ接触しないようにコントロールできていたが、今回からは選手とコーチが接触できるようになり、コーチやスタッフがどこまで選手と接触していいかのコントロールも明確にす



写真6 WAマネージャーと筆者の運営判断時の様子
(撮影日：2023年7月13日，撮影者：中條和之)

る必要がでてきた。その際の判断は「選手が必要と感じているか」であり、アスリートファーストを念頭に置いた運営をおこなった(写真6)。

最後に、大会当日にボランティアの方が来ないというトラブルも生じた。事前登録してあったボランティアの方が当日来ないために、急遽、役割配置の変更だけでなく、少ない人数での運営を余儀なくされた。これは東京五輪の際にも問題となった点であり、改めてボランティアによる運用の難しさを感じた。その中でも語学ボランティアの存在は大きく、英語が話せるボランティアの方々が各所で必要となった。年齢を問わず、語学力があるだけで活躍ができるということからも、国際大会の運営には語学力が必須であると感じた。

4.2. 世界マスターズ水泳選手権

4.2.1. 準備期間

世界水泳選手権よりあとに開催された世界マスターズ水泳選手権では、高水温対策が最重要課題となった。真夏の開催により、高水温による体への負担が大きくなるリスク、そして陸でも熱中症になるリスクが高く、どのようにすれば防げるかを考えて臨んだ。まずは熱中症対策として、できるだけ参加者を屋外で待たせないよう運営した。仮設テント内は空調設備が整っているため、屋外での運営時がスムーズにいくよう運営スタッフの拡充を図った。さらに、スタート時にぎりぎりまで水分補給できるようにすること、ゴール後には水分補給をすぐおこなえるようにすること、医務室だけでなく、ゴールやウォーミングアップ、最終ブリーフィング場所などに医者を配置し、何かあっ

た際にはすぐ対応できるようにした。

世界マスターズ水泳選手権は様々な国の人が参加すること、さらに英語が話せなくても積極的に大会に参加することから、英語だけでなく、中国語やスペイン語を話すことのできる語学ボランティアを配置した。また、語学ボランティアの数も限られていることから、標識を増やし、英語やスペイン語等で記載するという対応を取った。

4.2.2. 大会期間

大会期間において、監督者会議中に1名の参加者が意識を失い倒れるという事案が発生した。その際にもドクターが監督者会議会場にいていただいたこと、少しずくまっていたので、スタッフが声掛けを行い、意識を失う前にドクターに伝え横にいてもらったことから、意識を失った瞬間にドクターが対応し、3名でAED等の対応を行うことができた。その参加者は救急隊到着前に意識を取り戻し、ドクターの迅速な対応のおかげであったと考える。大会期間中はその1件の救急搬送のみで、その他は大きな事故がなく終えることができた。80歳を超える方々が参加する中で、無事故で終えることができたのは準備をしっかり行ったからであると考え。

世界マスターズ水泳選手権では宿舎をコントロールしていないことから、自身で競技会場に出向く必要があり、英語が通じない場面もあったのか、公式練習時間に間に合わないなどの参加者も見受けられた。日本の英語が通じない環境下が及ぼした影響でもあるのではないかと感じている。

さらにレースにおいては、WAのスタッフが参加者全員を泳がせてあげたいという理由からタイムリミットを設けずに1日目を実施した。その結果とは言わないが、少なからず最終泳者はフラフラになりゴールしていた。1日目終了後のミーティングでは、参加者の多くが無事終わってよかったという感想しか述べなかったため、筆者は、WAに対し、危険な運営をしていると感じたという感想を述べ、明日は本日より同じ運営はしないでほしいと要望した。ディスカッションの場を設けてもらい、運営方法を安全第一の考えに変更してもらうことができた。改めて、国際会議の場において、意見があれば口に出すということ、また、YES

やNOではなく、ディスカッションできる能力が必要であると感じた。

5. まとめ

本報告では、コロナ禍後の世界水泳選手権・世界マスターズ水泳選手権の運営報告と、国際大会の運営にあたりどのような人材が必要かをまとめることを目的とした。

今大会運営スタッフとして携わった結果、語学力とディスカッション能力の必要性を感じた。ヨーロッパ諸国の方々は母語が英語でなくても英語を話すことができ、またディスカッションもすることができる。国際人にとっては必須の能力であり、教育機関において、このような教育の場の必要性を感じた。また、スポーツの現場において、ボランティアスタッフに頼る運営の限界も感じ、プロフェッショナルとして人を雇用することの必要性も感じた。

さらに真夏での競技会運営により、高水温、天気の急変など地球温暖化の影響が大きくなっていることも感じた。屋外スポーツであること、特にOWSは水温が31度を超えると競技会を実施できないことから、環境問題へも興味を持ち、スポーツの力で何かできることがあるのではないかと考えることのできる人材の育成が必要であると感じた。

文献

- 1) 公益財団法人日本オリンピック委員会：東京オリンピック日本代表選手団日本オリンピック委員会公式写真集2020, 全競技結果と日本人選手の成績, 株式会社ポプラ社, 東京, 292-301, 2021.
- 2) 日本経済新聞：世界水泳福岡大会, 観客13万6,000人 チケット販売7億円, <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOJC127L40S3A910C2000000/>, 2023.9.25.
- 3) 世界水泳選手権2021福岡大会組織委員会：大会基本計画, https://www.fina-fukuoka2022.org/common/img/intro/index/master_plan_of_the_championships.pdf, 2023.9.24.
- 4) 世界水泳選手権2023福岡大会：世界マスターズ水泳選手権とは, <https://www.fina-fukuoka2022>.

- org/masters/, 2023.10.6.
- 5) World Aquatics : 1st FINA World Championships 1973, <https://www.worldaquatics.com/competitions/1099/1st-fina-world-championships-1973>, 2023.9.25.
 - 6) World Aquatics : The FINA General Congress elected a new President and a new Bureau: Husain Al Musallam elected new FINA President, <https://www.worldaquatics.com/news/2166496/husain-al-musallam-elected-new-fina-president>, 2023.9.24.
 - 7) World Aquatics : FINA becomes World Aquatics as new brand launched, <https://www.worldaquatics.com/news/2979029/fina-becomes-world-aquatics-as-new-brand-launched>, 2023.9.24.
 - 8) World Aquatics : Press Release | FINA announces changes to international events calendar, <https://www.worldaquatics.com/news/2462776/press-release-fina-announces-changes-to-international-events-calendar>, 2023.9.24.
 - 9) World Aquatics : World Aquatics Championships - Fukuoka 2023 RESULTS, <https://www.worldaquatics.com/competitions/1/world-aquatics-championships-fukuoka-2023/results?discipline=SY&disciplines=>, 2023.9.25.

総合科目分野

彝族の諺である「ルビ」収集資料について

Concerning Books Collecting the Yi “Lubyx” Proverbs

清水 享^a

Toru Shimizu^a

Abstract

The Yi people, a non-Han ethnic group living in China's Sichuan, Yunnan, and Guizhou provinces, call proverb “Lubyx”. Lubyx are told based on the unique life of the Yi people, and condense their life, society, and culture. Most Lubyxs are related in the form of short sentences, which consist of five or seven sounds and are told in two to five sentences. This paper looks back on the publication of books collecting Lubyx starting in the 1970s, and summarizes some aspects of Lubyx research from these Lubyx collections.

Key words: 彝族, 諺, ルビ, 彝文

1. はじめに

1.1. 涼山彝族

四川省, 雲南省, 貴州省など中国の西南地方に彝族は居住している。人口は約871万人を数えるⁱ。そして彝族の文化, 社会, 生活習慣, 方言などの様相は各地域で異なり, それぞれの地域に多くのサブエスニックグループを形成している。そのなかでも四川省涼山地方に居住する彝族(以後, 涼山彝族と表記)は「ノス」を自称し, 山岳地帯を中心に住んでいる。他地域の彝族は漢民族の文化を強く受け, いわゆる「漢化」が少なからず進んだ。それに対して涼山彝族の居住する地域は山岳地帯のため, 漢民族など他民族はほとんど居住せず, 現在でも彝族独自の言語や文化, 生活習慣を色濃く伝えている。

四川省涼山地方に集中的に居住しているこの涼山彝族は20世紀半ばまで黒彝・白彝からなる厳格な階層社会を形成していたⁱⁱ。そして彝族はアニミズムと祖

先崇拜を軸とした独自の信仰を有し, それに基づいた儀礼を行なっている。こうした信仰や儀礼は主に宗教職能者である「ꞑꞑ (bimop, ピモ, 畢摩)」(以下「ピモ」と表記)がこれを主宰する。ピモは現在でも涼山彝族社会に数多く存在し, 活発に活動を行なっている。

彝族の言語である彝語ⁱⁱⁱはビルマ=チベット語派に属する単音節言語である。文法的を見ても動詞は目的語の後ろに置かれる。彝語は彝族が居住する全地域で話されており, その方言差から, 方言地域は6つに区分される^{iv}。それぞれの方言の基礎的語彙は共通するものの発音などに大きな差異があり, 異なる方言では意思の疎通が難しい。涼山彝族が話す彝語は北方方言に属する。他の方言地域の彝語話者は漢語の影響を受け, 言語人口が減少する傾向が見られるが, 北方方言地域では彝語を母語とする人々が現在でも多く, 彝語による言語文化も広く継承されている。

彝族は独自の言語のみならず独自の文字である彝文(彝文字, 以下彝文と表記)を有する^v。彝文はどの時

^a 日本大学スポーツ科学部

College of Sports Sciences, Nihon University

i 中華人民共和国国家民族事務委員会, 中華各民族, 彝族, 概況」<https://www.neac.gov.cn/seac/ztlz/yz/gk.shtml> 2023年9月29日閲覧, なおこれは2010年の統計データであるが, 現在開示されている情報としては最新のものといえる。

ii 涼山彝族は1950年代に実施された「民主改革」以前は, 支配層のズモ, ノホと被支配層のチュホ, アジャ, ガシに別れ, 明確な階層差があった。

iii 「ロロ語」とも称される。ロロとは彝族を表す名称の1つであり, 漢字では「俛羅」などと表記される。

iv 「彝語方言は四川などの北方方言, 雲南東部, 貴州などの東部方言, 雲南西部の西部方言, 雲南中部の中部方言, 雲南東南部の東南部方言, 雲南南部の南部方言の6つに区分される。

v 「ロロ文字」とも称される。

代に作られたのかは不明であるが、貴州省の明代の鐘にも見られることから、少なくとも明代には体系化されていた。独自の文字であるこの彝文の基本語彙における形態は全彝族地域では同じであるが、文書の書式、文字の書き方、文字のバリエーションなどは地域により大いに異なる。涼山彝族の彝文字は他地域と異なり、縦に書いたものを横にして読む独特な文書の形態が見られる。そして涼山地方ではそれまでの彝文字を整理し、「規範彝文」を制定し、1980年には国务院が批准し、地域内では広く使用されるようになった^{vi}。

彝文文献は宗教的な経典が多く、主にピモが書き記し、彼らが主宰する儀礼においてこれを読み語った。そのため彝文文献は信仰や儀礼に関するものが非常に多い。もちろん彝文文献はこうした経典だけでなく儀礼の指南書、卜占、暦法、系譜、詩文、歴史、神話、医学、契約文書などさまざまなものがある。

彝族の言語文化として知られているものとして「𑄎𑄎 (kepnrep, クンジ, 克智)」(以下「クンジ」と表記)がある。これは声に出して朗読される詩であり、嫁入りの際に謡われる。そして歌垣のように掛け合いをして謡うものである。さらに本稿で取り上げる「𑄎𑄎 (Lubyx, ルビ, 爾比)」(以下「ルビ」と表記)は彝族の独特な生活から語られる諺であり、この諺には彝族の生活、社会、文化が凝縮されているといってもよい。

本稿ではこの諺であるルビについて、涼山彝族および他地域のルビ集を整理し、その概要を俯瞰する。

1.2. ルビとは

ルビは彝族が現在でも継承している言語文化である。ルビとは諺のことである。この諺は涼山彝語で「𑄎𑄎 (lubylyji, ルビルジ, 爾比爾吉)」ともいう。その多くは5音、あるいは7音からなる短い文を2文から5文程度で組み合わせた短文の形式で語られる。

例えば以下のようなものがある。

𑄎𑄎 (pat ap bbop jjo hxit, mop ap bbop jjo hxit, ddop jiet ap bbop jjo ap hxit, 父がなくとも暮らしていける, 母がなくとも暮らしていける, しかし決め事がなくんば暮らしていけぬ)¹⁾

𑄎𑄎 (njp mu nry jy yy, huo mu lat juo

yy, 彝族の地では酒を貴び, 漢族の地では茶を貴ぶ)²⁾

𑄎𑄎 (li ko qux ji duo, gga hni shy gno, 白い犁先を持ち上げ, 黄色き剥き出しの道に置く (物事がはっきりしている))³⁾

こうしたルビには「品德作風, 習慣法, 自然, 耕牧, 錢糧, 生活常情, 認識, 糾紛, 等級, 家族, 親戚, 命運, 比喻, 史地, 方法」⁴⁾など日々の生活全般に関わる内容がある。そしてこうしたルビは現在の涼山彝族の生活のなかで広く使われている。ルビを使うことで、表現の幅を広げ、その比喻の巧みさで人々の理解を深めさせ、涼山彝族社会における人々のコミュニケーションの幅も広がる。そして多くのルビを知り、表現することは涼山彝族文化の深奥を体得し、体現した人物として、涼山彝族社会の中で尊重され、尊敬の念をもって遇される。ルビのような諺を多く知り、かつ言語表現として広く使う人物は、その社会で尊重され、尊敬される。これは涼山彝族社会に限ったことでなく、人類社会において普遍的に見られることである。ただその表現の仕方、比喻の仕方はそれぞれの社会のあり方により異なり、それぞれの自然環境、社会形態、生業、経済状態、文化、習慣などから、違いが見られる。涼山彝族には涼山地方という山岳地帯に住み、牧畜と農業を主体とした生業を営み、過去に厳格な階層社会を形成し、漢族とは部分的に接触はするものの全体的には交流をせず、またピモを中心とした独自の信仰や独自の言語文字を使うこと、それらがすべてルビに反映されているのである。

涼山彝族におけるルビの総数については明確ではないが、2000年に編纂された『𑄎𑄎 (Nuosulubyxdozhy, ノスルビドジ彝族爾比詞典)』にはおよそ10,330句のルビが収録されている⁵⁾。このことからルビの全体総数は10,000句を超えている。ただなかには言い回しが少し異なるだけのものもあるため、その重複する句を考慮すると総数は10,000句を下回る可能性もある。

2. ルビ研究

ルビについての研究は中国において彝族文化、彝語、彝文を専門とする研究者が一部進めているのみである。またその研究者の多くは涼山地方の彝語を母語

vi 以下、本稿では特記しない限り、「規範彝文」とある表記は、この涼山地方の規範彝文を指す。

とする者がほとんどである。漢語など他言語を母語とする研究者は少ない。外国におけるルビ研究は皆無であり、もちろん日本においてもルビに関する研究の蓄積は全くなく、彝族文化に関する論考においてもルビはほとんど取り上げられたことはない。本稿ではルビの収集整理とルビ集の刊行を振り返る。そして現在までのルビ研究動向の一端を概観する。ルビに関する研究史そのものについては紙幅の関係により、次回に譲りたい。

2.1. ルビの収集整理とルビ集の刊行

2.1.1. 1970年代～1990年代刊行のルビ集について

涼山彝族の諺であるルビを収集したルビ集の最も古いものが1970年代後半に刊行された。それが曲比石美〔他〕収集翻訳、馮元蔚〔他〕整理校訂『涼山彝文資料選訳 第三集 爾比爾吉』（《涼山彝族社会》編写組、成都、1978）^{vii}である。本書に収録したルビは曲比石美、馮元蔚、蘆学良、沈文光が収集して漢語に翻訳し、それを曲比石美、馮元蔚が整理校訂を行なった。涼山各地で収集したルビが760句あまり収録されている⁸⁾。方言差などを整理し、国务院の批准前であったが、規範彝文を用いてルビを18に分類してまとめている。この18分類であるが、詳細が明記されておらず、どのような分類規準であるのか不明確である。また全てのルビには漢語訳が附記されている。さらに付録として「クンジ」が5首収録されている。本書は『涼山彝文資料選訳』といったシリーズの「内部発行」の刊行物であり、正式出版ではなかった。シリーズには英雄譚「 Hnewotepyy 、ヌウウォテジ」や婚姻についての女性の嘆きを歌う抒情詩「 Axmohnixsse 、アモホニヒィザ」が収められている。

1980年代にいち早くルビを収集した刊行物として、喜徳県文教局、喜徳県語言文字工作委員会編『 $\text{Nuosukepnreplubyxsinipbbudde}$ 、ノルルビクンジシニブダ、彝族克智爾比と故事』（民族出版社、北京、1980）がある。本書は喜徳県政府の言語文字政

策関係部署から刊行されたものであり、ルビだけでなく朗誦詩であるクンジと「民間故事（民話）」を規範彝文で収録している。ルビだけを収録したものではないが、正式出版によって刊行されたルビ集としてはかなり早い時期ものといえる。

1981年には四川民族事務委員会彝語文工作組編『彝族格言（彝文版）』（四川民族出版社、成都、1981）が刊行された。四川民族出版社から刊行されたものであるが、本書はルビ集としての初の正式出版であった。馬黒木呷、馬明、羅家修、趙宇光が3,100句あまりのルビを収集した⁹⁾。本書は彝語の「注音符號」^{viii}順でルビを配列している。この注音符號順のルビの配列は、後のルビ集にも引き継がれた体裁の1つとなった。本書は1985年に新装版も刊行されている。

涼山彝族のルビについて早い時期から注目していたと思われる人物に民国時代に涼山彝族の土司であった嶺光電がいる。彼は民国時代に土司^{ix}という政治的な立場にありながら彝族文化に対して関心が高く、1940年代から彝文經典の翻訳⁹⁾や民間説話の収集刊行を行なっている⁹⁾。この嶺光電が1980年代にルビ集を刊行した。これらは全て正式出版ではなく、「油印本（謄写版）」として刊行されたものだった。そのなかでも嶺光電訳『諺語（ Luby 、ルビ）』（上）（中）（下）（中央民族大学民族語言研究所彝族歴史文献編訳班、北京、1982-1983）は、上中下の3分冊だった。そして本書の彝文は規範彝文でなく、手書きの彝文に漢語訳とIPA（国際表音記号）を附したものであった。特徴的なのは、彝文の逐語訳と文全体の訳の2種類の漢語訳が付されていることである。また上中下巻に収録されているルビは合計2,000句にのぼる¹⁰⁾。前章で述べたように、それを16分類している。嶺光電は他に『涼山彝族有関婦女的諺語（ $\text{Nipshan-uosusihnimupmitluby}$ 、ネシャノスシニヒィムミィルビ）』（中央民族大学民族語言研究所彝族歴史文献編訳班、北京、1982(?)）も同時期¹¹⁾に「油印本（謄写版）」により刊行している。本書の体裁も基本的には『諺語（ Luby 、ルビ）』と同じであり、女性に関するルビ

vii 本稿でルビ集として言及する刊行物は紙幅の制限により、書誌情報は本文に示し、引用参考文献には示さない。以下全ての刊行物の書誌情報も同じように示す。

viii 涼山彝語のアルファベット表記のことであり、独自の表記法によって示される。

ix 非漢民族の首長に官位を与えて、その地を間接的に統治する方法である。

を整理分類して収録した。分類は「父母、子女、女兒、美、婚姻、婆家（実家）、処家（家事）、感情、習慣法、親戚、其它（その他）」の11分類であり¹²⁾、合計約280句を掲載している。ルビの翻訳作業を進めた嶺光電は1980年代に中央民族学院民族語言研究所彝族歴史文獻專修班の教員として¹³⁾、こうしたルビ集以外に多く彝文文獻の翻訳を進めて「油印本（謄写版）」の彝文文獻翻譯集を刊行していた。

「油印本（謄写版）」のルビ集には、他に1981年に刊行された中央民族語研所彝族歴史文獻編訳室編『彝族格言』（中央民族学院語研所彝族歴史文獻編訳室、北京、1981）がある。本書は張仲仁などが彝族の格言をまとめた文獻の翻譯である¹⁴⁾。文獻は彝文の字体から雲南省武定、禄勸付近の東部方言地域のものであり、涼山地方のものではない。ルビは彝文とIPA（国際表音記号）および漢語対訳で示されている。このような涼山彝族以外の地域のルビ集の刊行も以後見られるようになる。さらに「油印本（謄写版）」で刊行されたルビ集には西南民族学院語文系彝語言文學教學組編『ᠨᠤᠰᠤᠯᠤᠪᠢᠭᠭᠡ（Nuosulubyxgge、ノスルビグ、彝族謄集）』（西南民族学院語文系彝語言文學教學組、成都、1988）がある。本書は1988年に刊行されたもので、すべて規範彝文で書かれて、彝語の注音順に整理され、収録されている。

1982年には楊植、森頼偉、吉木布初、阿魯斯基、張克新編『涼山彝語諺語』（四川民族出版社、成都、1982）が刊行された。本書はすべて漢語に訳したルビが収録されており、彝文は全く示されていない。ルビを8分類しているが、詳細は明記されておらず、分類の基準は不明である。

1980年代はこの他に涼山地方北部に位置する甘洛県のルビを収集した甘洛県語委集成辦編『甘洛県民間諺語集』（甘洛県語委集成辦、四川甘洛、1988）があり、1988年に刊行された。本書には3,500句あまりのルビが規範彝文と漢語の対訳の形式で収められているが¹⁵⁾、有意な配列にはなっていない。本書を編纂した「語委集成辦」は語言文字工作員會民間故事集成辦公室のことであり、後述する「民間文學集成」の事業を担当し

た部署である。

1989年には楊繼中、盧培林収集整理、加甲・張仲仁翻譯『彝族諺語選』（雲南民族出版社、昆明、1989）が刊行された。本書は四川、雲南、貴州の彝族地域に伝わるルビを563句収録している¹⁶⁾。前半に漢語訳が示され、後半に雲南規範彝文^xによるルビが掲載されている。そしてこれらのルビは「風土篇」、「農牧篇」、「訓戒篇」、「諷諭篇」の4章に分類されている。

1990年に入ると、まず1990年に涼山州^{xi}民間文學三套集成編委會編『ᠯᠤᠪᠢᠶ᠋ᠰᠤᠯᠤᠵᠢ（Lubyxluji、ルビルジ、爾比爾吉）』（涼山州民間文學三套集成編委會、四川西昌（?）、1990）が刊行された。本書は「油印本（謄写版）」であり、ルビは手書きの彝漢対訳で掲載されている。編者は涼山州民間文學三套集成編委會とあり、この「民間文學三套集成」とは1980年代から行われた「中国民間故事集成」、「中国歌謡」、「中国諺語集成」の収集編纂事業である。本書はこの収集編纂事業において涼山彝族のルビの基礎資料を収集整理したものと考えられる。この「油印本（謄写版）」の刊行物を基礎として、1995年に涼山民間文學集成編委會編『中国民間文學集成涼山卷諺語卷』（涼山州文學藝術界連合會、四川西昌、1995）が刊行された。本書は民間文學集成編纂委員會が中心となって涼山彝族自治州内のルビ10,956句を収集し¹⁷⁾、馬德清が主編となって整理分類され、刊行された。収録されたルビは「時政類」、「事理類」、「社交類」、「修養類」、「生活類」、「生産類」、「其他類」の7つに分類され、規範彝文による彝漢対訳の形式で示されている。ただし、全約200ページであり、収集したルビすべてが収録されているわけではなかった。また「前言」の後に、ルビの解説も漢語で付記されている。

涼山地方ではないが、1990年に貴州省において赫章県民族事務委員會彙集『彝族民間文學第1輯』（赫章県民族事務委員會、貴州赫章、1990）が刊行された。貴州西北部に位置する赫章県の彝族の諺を収集したものである。本書はすべて漢語で記されており、彝族の諺のみならず歌謡も収録されている。

1990年代には涼山州編訳局もルビを収集した。そし

x 雲南省で標準化した彝文であり、1987年に試行され、1995年に改訂修正された。約2,600文字からなるが、方言差の大きな彝語の共通文字としての普及にまでは至っていない。

xi 正式名称は涼山彝族自治州。本稿では全て涼山州と表記。

て1992年から1995年にかけて涼山州編訳局編『诺苏尔比积义 (Nuosulubyxhxati, ノスルビハティッ, 彝族爾比积義) I・II・III』(四川族出版社, 成都, 1992・1993・1995)が刊行された。1992年に第1分冊が、翌年に第2分冊が刊行され、そして1995年に第3分冊が刊行された。この3分冊はルビとその解説が全て規範彝文によって書かれている。またルビに関する概要は規範彝文と漢語で記されている。ルビの配列は規範彝文の注音順である。ルビには1句1句全てに規範彝文による解説が示されている。ルビは第1分冊で2,000句あまり収録されていることが明記されているが¹⁸⁾、第2, 3分冊には収録数は明記されていない。全体の収録数は単純な推計をしても、少なくとも6,000句以上あると考えられる。涼山彝族自治州編訳局はさらに内容を補充発展させた『诺苏尔比词典 (Nuosulubyxddopzhy, ノスルビドジ, 彝族爾比词典)』(四川族出版社, 成都, 2000)を2000年に改めて刊行した。本書は前述したように、10,330句のルビが収録されている¹⁹⁾。すべて規範彝文で書かれた本書のルビも規範彝文の注音順で示されており、『诺苏尔比积义 (Nuosulubyxhxati, ノスルビハティッ, 彝族爾比积義)』と同様にルビ1句1句全てに規範彝文による解説が付記されている。上記の2部のルビ集はその収録数の多さと詳細な解説内容から、涼山彝族のルビを収集した資料として最も重要なものであるといえよう。

雲南省の彝族のルビ集も刊行された。1992年に李成智、陽輝普、拉基採録翻訳、禄勸県彝族苗族自治県民委民族古籍辦編『彝族民間諺語』(雲南民族出版社, 昆明, 1992)が刊行された。本書のルビの収集地について、「前言」にも「後記」にも明記はされていないが、禄勸県民族事務委員会民族古籍辦公室が編纂しており、雲南北部に位置し、彝語の東部方言地域である禄勸県内の彝族のルビであるといえよう。ルビは6分類され、東部方言の彝文とその国際表音記号(IPA)が記され、漢語訳も付記されている。貴州省に居住する彝族のルビ集も刊行された。1992年には楊浩青、張和平、陳光明編、陳光明訳『彝族諺語讀本』(貴州民族出版社, 貴陽, 1992)が刊行された。本書には貴州

彝族のルビが700句ほど収録されている。本書は貴州彝族教育の教本の1つとして編纂されたものだった²⁰⁾。ルビは15分類され、貴州彝文に漢語を附記した体裁をとっている。

1996年には雲南省路南県(現石林県)の彝族のルビを収集した中共路南彝族自治县委宣传部、路南彝族自治州文化館編『路南諺語 雲南民間文学集成』(雲南民族出版社, 昆明, 1996)が刊行された。路南県(現石林県)の彝族は彝語の東南部方言を話し、自称は「サニ」である。本書に収録されたルビは7分類されている。このような「民間故事集成」には、他に雲南省の東北部に位置する昭通市の彝族のルビを収録した昭通市文化局・民族事務委員会編『云南民间文学集成 昭通市彝族卷』(昭通市文化局・民族事務委員会, 雲南昭通, 1996)があり、本書は同じ年に刊行されている。本書はすべて漢語で記されているが、彝族の神話、伝説、故事、歌謡とともにルビが収録されている。路南県(現石林県)、昭通市のどちらも「民間文学集成」の事業として各縣市によって編纂されたものだった。

1990年代にはこの他に小涼山地方^{xii)}と呼ばれる雲南省寧蒗県のルビを収集した肖建華、蘇学文訳注『雲南小涼山彝族爾比』(雲南民族出版社, 昆明, 1996)も刊行された。本書にはこの地域で収集されたルビが4,100句ほど規範彝文と漢語による対訳の形式により、その内容から「歴史時政」、「事理」、「修養」、「社交」、「生活」、「自然」、「生産」の7分類された上で、収録されている²¹⁾。

2.1.2. 2000年代以降に刊行されたルビ集

2000年代にはまず、2006年に越西彝学会編『维托诺斯克尼日比 (Vyttuonuosukepnreplubyx, ヴィトノスクンジルビ, 越西彝族克智尔比)』(越西彝学会, 四川越西, 2006)が刊行された。本書は涼山州越西県で収集されたクンジとルビが全文規範彝文でまとめられている。

2007年には彝族文化研究所からポケット版のルビ集が刊行された。それが吉克曲日主編『诺苏尔比读本 (Nuosulubyxlujisidazzit, ノスルビルジシタズィ, 彝族格言积義選集)』(涼山州彝族文化研究所, 四川西昌,

xii 涼山地方の中心地帯は通称「大涼山」と呼ばれ、その東側および西側は通称「小涼山」と呼ばれる地域であり、雲南省寧蒗県は西側の小涼山地方である。

西康出身の作家であり、本書と同時に短編小説選、文学評論、詩集、彝学（彝族研究）に関する著作を刊行している。

上記のようなルビ集以外に光学メディアを媒体としたルビ集もあり、注目される。刊行年は不明であるが、涼山地方北部の美姑県がこうした光学メディアを媒体として中国共産党美姑県委員会、美姑県政府、美姑県依法治県領導小組編『美姑彝族伝統格言』（美姑県政府、四川美姑、刊行年不明）を刊行している。美姑県依法治県領導小組は法による統治を指導する小委員会であり、ルビを利用して法による統治を人々に周知させようとしたものである。

3. 小結

彝族の諺であるルビを収集整理して、刊行が行われ始めたのは1970年代後半からであった。1980年代には喜徳県文教局や四川省民族事務委員会彝語文工作組からルビ集が刊行された。また元土司であり彝族文化に関心が高かった嶺光電による「油印本（謄写版）」のルビ集もこの時期に刊行された。同じくこの時期に漢語訳のみによる涼山地方のルビ集も刊行されたが、涼山地方では漢語のみのルビ集はほとんどなく、珍しい事例であった。そして1980年代後半から四川省涼山地方のみならず、貴州や雲南の彝族のルビを収集した刊行物が編纂されるようになった。

1990年代になると「民間文学三套集成」の編纂事業によりルビ集が涼山州で編纂されたが、涼山州のみならず、貴州省赫章県、雲南省路南県、昭通市などの各地で「民間文学集成」の一環として彝族のルビ集が編纂されるようになり、ルビへの関心も高まってきた。そして1992年から4年がかりで『诺苏鲁比哈义』（Nuosulubyxhaxi, ノスルビハティツ、彝族爾比积義）I・II・III』が刊行された。本書は涼山地方のルビに関してのいわば集大成であるといえよう。ルビ集の多くはルビを収録した上で彝文と漢語訳を附記しただけでルビについての解説のないものがほとんどであるなか、本書は全て規範彝文ではあるが、1つ1つのルビに詳細な解説が付記されていた。これは特筆されるべきものである。そして本書の内容を改訂増補したのが2000年に刊行された『诺苏鲁比积义』（Nuosulubyxddopzhy, ノスルビドジ、彝族爾比詞典）』であり、内容はさらに

充実したものとなっていた。これらのように詳細なルビの解説を加えたルビ集は他にほとんど見られない。

涼山地方から刊行されたルビ集は基本的に規範彝文によって書かれ、それに漢語訳を附記しているものがほとんどである。雲南や貴州のルビ集については漢語訳のみの表記、雲南規範彝文、貴州彝文など各地の彝文に漢語訳を附記した形式のものが多い。

2000年代になると、涼山地方のルビ集が立て続けに刊行され、このようななかで『诺苏鲁比克智积读』（Nuosulubyxkepnrepzhyxi, ノスルビクンジジビ、彝族爾比克智积讀）のように彝文を学ぶ教材として編集されたルビ集も現れた。2010年代以降はさらにルビ集の刊行は活発化し、数多くのルビ集が編纂された。そして『鲁比沙比』（Lubyxsidabi, ルビシタビ、彝族經典爾比選讀）のように規範彝文のルビに漢語訳と英語訳が併記されたルビ集が刊行された。英語訳が付記されたルビ集の刊行はこれがはじめてであり、他に類を見ない。また近年、映像によるデータを収録した光学メディアのルビ集の刊行もみられた。こうしたルビ集は、明解にルビについて知りうるができるため、今後各地から刊行されることが予想される。

2020年代もルビ集の刊行は続き、貴州彝文のルビ集や雲南省元江県の彝語南方方言地域のルビ集も刊行された。現在の彝族のルビ集刊行の状況を振り返ってみると、今後も継続的にルビ集は刊行されていくであろう。ルビは諺であり、そこには彝族の人々の社会、文化、思考、生活、習慣が広く反映されている。そのためルビを整理収集したルビ集は彝族の人々のアイデンティティに深く関わり、現代の彝族文化を示すものとして数多く刊行されてきた。将来も彝族のアイデンティティが保持され続けていくのであれば、今後もルビ集の刊行は途切れることはないであろう。

本稿では彝族のルビ集の刊行に関して整理し、ほんのわずかであるが分析を加えたものである。彝族のルビそのものに関する研究史は次の機会に譲りたい。

引用参考文献および文献についての註記

- 1) 涼山州編訳局：『诺苏鲁比哈义』（Nuosulubyxhaxi, ノスルビハティツ、彝族爾比积義）I, 四川民族出版社, 成都, 1992, 196

- 2) 涼山州編訳局： ᠨᠤᠰᠤᠯᠤᠪᠢᠶᠢᠬᠢᠬᠢᠲᠢ (Nuosulubyxhxati, ノスルビハティツ, 彝族爾比积義) II, 四川族出版社, 成都, 1993, 103
- 3) 涼山州編訳局： ᠨᠤᠰᠤᠯᠤᠪᠢᠶᠢᠬᠢᠬᠢᠲᠢ (Nuosulubyxhxati, ノスルビハティツ, 彝族爾比积義) II, 四川族出版社, 成都, 1993, 170
- 4) 嶺光電訳：諺語 (ᠮᠣᠯᠦᠭᠡ , Luby, ルビ) (下), 中央民族大学民族語言研究所彝族歴史文献編訳班, 北京, 1983, [目次] 1
- 5) 涼山州編訳局： ᠨᠤᠰᠤᠯᠤᠪᠢᠶᠢᠳᠠᠳᠠᠵᠢ (Nuosulubyxddopzhy, ノスルビドジ, 彝族爾比詞典), 四川族出版社, 成都, 2000, 「前言」 2
- 6) 曲比石美 [他] 収集翻訳, 馮元蔚 [他] 整理校訂：涼山彝文資料選訳 第三集 爾比爾吉, 《涼山彝族社会》編写組, 成都, 1978, 184
- 7) 四川省民族事務委員会彝語文工作組編：彝族格言, 四川民族出版社, 成都, 1981, 「前言」
- 8) 嶺光電：僛僛經典選訳, 西康青年, 第4卷5期, 西康青年社, 四川西昌, 1942, 45
- 9) 嶺光電：彝族民間故事, 上海時代書局, 上海, 1950
- 10) 嶺光電訳：諺語 (ᠮᠣᠯᠦᠭᠡ , Luby, ルビ) (下), 中央民族大学民族語言研究所彝族歴史文献編訳班, 北京, 1983, 「《諺語》的幾点説明」 1. ただ上巻の「諺語説明」では上巻に616句, 中巻の「説明」には750句が収録されているともあり, 下巻の「《諺語》的幾点説明」には3,600句の翻訳を行なったともある。
- 11) 温春来, 爾布什哈主編：嶺光電文集 (上冊), 香港科技大学華南研究中心出版, 香港, 2010, 4によると1982年ごろに彝文文献の翻訳集をいくつか刊行している。
- 12) 嶺光電：涼山彝族有関婦女的諺語 ($\text{ᠨᠢᠯᠠᠰᠢᠨᠤᠰᠤᠶᠢᠬᠢᠬᠢᠲᠢᠯᠦᠪᠦ}$, Nipshanususihnimupmitluby, ネシャノスシニヒムミイルビ) 中央民族大学民族語言研究所彝族歴史文献編訳班, 北京, 1982 (?), 「《涼山彝族有関婦女的諺語》目次」
- 13) 温春来, 爾布什哈主編：嶺光電文集 (上冊), 香港科技大学華南研究中心出版, 香港, 2010, 4
- 14) 中央民族学院語研所彝族歴史文献編訳室編：彝族格言, 中央民族学院語研所彝族歴史文献編訳室, 北京, 1981, 「付印説明」 1
- 15) 甘洛県語委集成辦編：甘洛県民間諺語集, 甘洛県語委集成辦, 四川甘洛, 1988, 「説明」
- 16) 楊繼中, 盧培林収集整理, 加甲, 張仲仁翻訳：彝族諺語選, 雲南民族出版社, 昆明, 1989, 「編者的話」 1
- 17) 涼山民間文学集成編委會編：中国民間文学集成涼山卷諺語卷, 涼山州文学芸術界連合会, 四川西昌, 1995, 「後記」
- 18) 涼山州編訳局： ᠨᠤᠰᠤᠯᠤᠪᠢᠶᠢᠬᠢᠬᠢᠲᠢ (Nuosulubyxhxati, ノスルビハティツ, 彝族爾比积義) I, 四川族出版社, 成都, 1992, 「前言」 3
- 19) 涼山州編訳局： ᠨᠤᠰᠤᠯᠤᠪᠢᠶᠢᠳᠠᠳᠠᠵᠢ (Nuosulubyxddopzhy, ノスルビドジ, 彝族爾比詞典), 四川族出版社, 成都, 2000, 「前言」 2
- 20) 楊浩青, 張和平, 陳光明編, 陳光明訳：彝族諺語讀本, 貴州民族出版社, 貴陽, 1992, 「序」 1
- 21) 肖建華, 蘇学文訳注：雲南小涼山彝族爾比, 雲南民族出版社, 昆明, 1996, 450
- 22) 吉克曲日主編： $\text{ᠨᠤᠰᠤᠯᠤᠪᠢᠶᠢᠵᠢᠰᠢᠳᠠᠵᠢᠲᠢ}$ (Nuosulubyxlujisidazzit, ノスルビルジシタズィ, 彝族格言积義選集), 涼山州彝族文化研究所, 四川西昌, 2007, 「編者的話」 5

John Miltonの*Of Education*におけるキリスト教的体育思想 (前編)ⁱOn the Christian Thought of Physical Education
in *Of Education* by John Milton桶田 由衣^aYui Oketa^a

Abstract

Physical education in John Milton's *Of Education* has been defined in theory as “humanist realism”, “military training”, and “spartan training”. However, there are few Milton researchers who have explored how Milton's thinking on physical education has been addressed in the history of physical education. This paper consequently examines the overlooked concept of physical education in *Of Education*, on which research in the history of physical education has rarely focused. Milton believed that true Christians must have knowledge both of the classics and of Christianity. However, most researchers of physical education have mentioned Milton's thought as realistic and based on the classics; they have thus overlooked the religious and spiritual goals espoused in *Of Education*. This has resulted in a misunderstanding of Milton's ideal purpose of education. In addition, Milton uses the words “fortitude” and “patience”, which he regards as constituting the highest virtue arguing his ideal exercise – a topic on which research in the history of physical education has not focused. These concepts are indispensable for understanding that Milton saw physical education as necessary to nurture Christians. This study therefore shows the difficulty of discerning Milton's true thought from research on the history of physical education, as well as the possibility that literature research can supplement the research being undertaken in other fields.

Key words: exercise, physical education, physical activity, Christianity
運動, 体育, 身体活動, キリスト教

序論

17世紀の英国詩人John Milton (1608-74)は、自身の教育論を論じた*Of Education* (1644)の巻末に“Exercise”「体育」の項目を設けて、体育の必要性を説いていたⁱⁱ。本作品は、12歳から21歳の上流階級の男子に施すためのカリキュラムについて綴られている。オランダの人文主義者・神学者Desiderius Erasmus

(1466?-1536)の着想を基に創設されたセント・ポールズ校等において、体育が重視されていなかったのは周知の事実ではあるが²⁾、Miltonは同校を卒業している。それゆえ、Miltonが体育について紙面を割いて論じることは、Miltonの体育に対する関心の高さを窺い知ることができる。実際、多くの体育史ⁱⁱⁱにおいて、Miltonは17世紀の体育思想に寄与した人物の一人として挙げられている^{iv}。

^a 日本大学スポーツ科学部

College of Sports Sciences, Nihon University

ⁱ 紙幅の関係で、本論は前後編に分けることとする。

ⁱⁱ “Exercise”の訳「体育」については、私市・黒田訳¹⁾『教育論』にならった。*Of Education*の“Exercise”には、運動のみならず、レクリエーションや食事等についても言及されているため、本論における訳語も「運動」にせず、「体育」を用いた。

ⁱⁱⁱ 昨今、世界的に「体育」が「スポーツ」へと名称変更している動向は、高橋³⁾が指摘しているところである。『最新スポーツ科学事典』⁴⁾序文においても、「体育学」をも包括する上位概念として「スポーツ科学」を位置づけていると述べられている。それゆえ、「体育史」ではなく「スポーツ史」と表記するのが適切である。しかしながら、“sport”「スポーツ」という言葉は、現代とMiltonが*Of Education*を執筆した17世紀では、その意味や内容に乖離がある。例えば、水野⁵⁾は、17世紀において“sport”は「遊び」を基調とし、現代のフットボールやラグビーといったスポーツとは別物だと指摘している。また森丘⁶⁾は、19世紀まではスポーツに娯楽やギャンブル以上の意義や価値を認めていなかったと説明している。これらのことから、本論においては「体育史」と表記する。

^{iv} 本論において検証した先行研究については、次章で説明したい。

従来の体育史研究において、Miltonの体育思想は、特に「古典主義」、「実学主義」、「スパルタ式」と評されている。杉本政繁⁷⁾は、*Of Education*におけるMiltonの体育思想について、Plato (427-347 B.C.) や Aristotle (384-322 B.C.) 等の思想が反映され、国家の指導者となるべく人物を育成するために、軍事教練を通じた体育が実施され、それが教養学科目と並ぶ必須要素としてとらえられていることを指摘し、さらに従来の体育史研究の中でMiltonへの言及が認められることを端的にまとめている。特に、同論文の*Of Education*における“exercise”, “recreation”, “sport”といった語の使用例に関する研究は、これまでの体育史研究およびMilton研究においても十分に検証されていなかったが、一部の引用例や“sport”の語の使用については、再度検証が必要と思われる箇所がある^{v)}。このように、体育史の観点からのMiltonの体育に関する研究は行われているものの、文学研究からのMiltonの体育および体育思想への寄与に関して論じた研究は多くない。一例を挙げれば、Lieb⁸⁾は、Miltonの作品において肉体的状態が精神にも関連する例を挙げて、体育と宗教の関連性を指摘しているが、従来の体育史研究におけるMiltonに対する評価や体育史研究で指摘されない点については言及していない。一方で、体育史の先行研究においては、通例Milton研究であれば、*Of Education*を論じる際に必ず言及されるキリスト教との関連について、あまり言及されていない。本論は、Miltonの*Of Education*において、体育史研究が着目していない箇所を検証し、Miltonの意図する教育目標、理想のキリスト教徒像について探りたい^{vi)}。

1. 先行研究におけるMiltonの体育思想

本論に入る前に、従来の体育史研究におけるMilton

および*Of Education*のカリキュラムに対する評価についての検証結果を提示したい^{vii)}。まず、体育史の中でMiltonの立ち位置についてみると、多くの体育史研究において、主に16世紀から17世紀に活躍した Humanist Realistの体育論者の一人としてMiltonの名が挙げられ、その中で英国のRoger Aschan (1516-68)、フランスのFrançois Rabelais (1483-1553)と同列にその名が列挙されていた^{viii)}。他には、スペインのJuan Luis Vives (1492-1540)、英国のRichard Mulcaster (c.1531-1611)、Frances Bacon (1561-1626)に並んでMiltonの名を挙げている先行研究も認められた¹⁶⁾。特に17世紀の英国の Humanist Realistの体育論者として、Miltonは、体育史を理解する上で不可欠といっても過言ではないだろう。さらに中村¹⁷⁾は、19世紀初頭に主にパブリック・スクールで成立してきた近代スポーツ教育の確立の過程を検証するに当たり、17世紀のピューリタン革命時に代表されるMiltonを含むピューリタンの教育論について言及する必要性を述べている。ピューリタン革命によって発足した共和政は、約10年で潰えるものの、それが後の近代スポーツ教育の礎の一つになっていることを示していると言える。

続いて、*Of Education*については、表1のように言及されている。Miltonの*Of Education*における体育思想の特徴は、「古典主義」や「実学主義の教育」、「軍事教練」、「上流階級の男子のための教育」、「心身の発達に関する教育」といったものが多く挙げられていた。「古典主義」、「軍事教練」については、表現こそ違うものの、後ほど詳述するMiltonの体育思想が、古代ギリシアのスパルタにおける軍事教練を意識していることから、これら二つは古典的要素すなわちギリシアにおける実践的な身体訓練を想起させる表現であ

v “recreation”の使用例として挙げている例文について、*Of Education*とは異なるMiltonの作品から引用している箇所が一部認められた。しかしながら、一見*Of Education*からの引用のように見えるため、扱いには注意されたい。

vi Miltonの作品から引用する場合は、全て*The Works of John Milton*⁹⁾を用いる。今後韻文作品は引用文の後の括弧に行数を、散文作品は引用文の後の括弧にページ数を記載する。なお、行数およびページ数の後のvol.は、*The Works of John Milton*から引用した巻数を示す。

vii 今回の検証で用いた先行研究は、主に杉本政繁¹⁰⁾の論文を参考にし、検証を行ったが、同論文の検証に含まれていないものも対象とした。本論で用いた先行研究については、次の10本の引証資料を参照されたい¹¹⁾。別の先行研究も検証したが、Miltonに関する言及は無かった。次の引証資料を参照のこと¹²⁾。

viii Leonard¹³⁾は、16世紀から17世紀に活躍した体育論者18名を挙げ、その時代の最後を飾る人物として、Miltonを挙げている。Mechikoff¹⁴⁾は、1560年から1789年までの体育に関して、他の先行研究と異なりMiltonとその体育思想について言及していないものの、体育史関連人物の一覧の中にMiltonを含めており、体育に貢献した人物としてみなしていたと言える。

表 1 先行研究で言及されている *Of Education* の評価

<i>Of Education</i> の評価	先行研究
古典文献を典拠・古典主義	Hackensmith (99-100); Zeigler (93); Brailsford (95)
実学主義の教育	Hackensmith (99-100); Rice, Hutchinson, and Lee (54); Van Dalen and Bennett (165); Leonard and Affleck (57); Zeigler (93); 今村 (42-44)
軍事訓練を基調としたプログラム、戦争に向けた体育の有用、スパルタ式のカリキュラム	Rice, Hutchinson, and Lee (55); Van Dalen and Bennett (165, 167); Leonard and Affleck (57); 中村 (43); Zeigler (93); 今村 (44); Brailsford (96-7)
上流階級の男子の教育にのみ焦点を当てた教育論	Rice, Hutchinson, and Lee (55); Van Dalen and Bennett (166); Leonard and Affleck (57); Brailsford (98)
身体運動とメンタル・道徳面の教育	Van Dalen and Bennett (164); Leonard and Affleck (57); McIntosh (43); 今村 (44); Brailsford (96)

る¹⁸。しかしながら、体育史研究で取り上げられる *Of Education* の引用箇所を見ると、文学研究と体育史研究において、引用箇所に差があることが明らかとなった。特にそれは、前述したギリシアにおける軍事教練と関連する箇所において認められた。次章において、その差について詳述する。(後編に続く)

引証資料

- 1) ミルトン, ジョン: 教育論, 私市元宏・黒田健二郎訳, 未来社, 東京, 1984.
- 2) McIntosh, P. C.: *Sport in Society*. London: C. A. Watts & Co. Ltd; 1971: 41. Lieb, Michael.: "The Sinews of Ulysses": Exercise and Education in Milton. *The Journal of General Education*. 1985; 36(4): 249.
- 3) 高橋健夫: 体育と体育学, 体育原理講義, 中村敏雄・高橋健夫編, 大修館書店, 東京, 22-33, 2009.
- 4) 日本体育学会編: 最新スポーツ科学事典, 平凡社, 東京, 1-2, 2006.
- 5) 水野忠文: スポーツとは何か, スポーツの科学的原理, 大修館書店, 東京, 23, 1978.
- 6) 森丘保典: 近代スポーツの成立と発展, コーチン

グ学への招待, 大修館書店, 東京, 3, 2022.

- 7) 杉本政繁: ミルトンの体育思想— "Of Education" (1644) に見るルネサンス期の体育—, 大阪体育大学紀要, 2005, 36: 1-9.
- 8) Lieb, Michael.: "The Sinews of Ulysses": Exercise and Education in Milton. *The Journal of General Education*. 1985; 36(4): 245-56.
- 9) Milton, John: *The Works of John Milton*. General editor, Frank Allen Patterson, 23 vols, Tokyo: Hon-no-tomoshia; 1993.
- 10) 杉本政繁: ミルトンの体育思想— "Of Education" (1644) に見るルネサンス期の体育—, 大阪体育大学紀要, 2005, 36: 1-9.
- 11) Hackensmith, C. W.: *History of Physical Education*. New York: Harper & Row; 1966. Rice, Emmett A., John L. Hutchinson, Mabel Lee.: *A Brief History of Physical Education*. 5th ed. New York: The Ronald Press Company; 1969. Van Dalen, Deobold B., and Bruce L. Bennett.: *A World History of Physical Education: Cultural, Philosophical, Comparative*. 2nd ed. New Jersey: Prentice Hall, Inc.; 1971. Leonard, Fred Eugene, and George B. Affleck.: *A Guide to the History of Physical Education*. Connecticut: Greenwood Press; 1971. McIntosh, P. C.: *Sport in*

ix Lieb¹⁸ はギリシアにおける体育が教育として用いられており、特にその中でも Plato や Aristotle の作品の一節を引用しながら、レスリングや軍事教練について言及されているという。Plato と Aristotle の作品については、次の引証資料を参照のこと¹⁹。また、*Of Education* の特徴が複数挙げられる理由として、本作品の体育が身体活動だけでなく多岐に渡るレクリエーションも含むからであると考えられる。

- Society*. London: C. A. Watts & Co. Ltd; 1971. 中村敏雄：スポーツと教育 スポーツを考えるシリーズ3, 大修館書店, 東京, 1978. Zeigler, Earle F.: *History of Physical Education and Sport*. Revised ed. Illinois: Stipes Publishing Company; 1988. 今村嘉雄：西洋体育史上, 戦後体育基本資料集, 第17巻, 木下秀明監修, 大空社, 東京, 1996. Brailsford, Dennis.: *Sport and Society: Elizabeth to Anne*. London: Routledge & Kegan Paul; 2010. Mechikoff, Robert A.: *A History and Philosophy of Sport and Physical Education: From Ancient Civilizations to the Modern World*. 8th ed. New York: McGraw Hill LLC; 2024.
- 12) McIntosh, P. C. et al.: *Landmarks in the History of Physical Education*. London: Routledge & Kegan Paul; 1981. 写真記録刊行会編：〈体育・スポーツ〉の世界史, 日本図書センター, 東京, 2011. 中房敏朗・石井昌幸他：スポーツの世界史, 一色出版, 東京, 2018. マコーム, デイビッド・G：スポーツの世界史, 中房敏朗・ウエイン・ジュリアン訳, ミネルヴァ書房, 京都, 2023.
- 13) Leonard, Fred Eugene, and George B. Affleck.: *A Guide to the History of Physical Education*. Connecticut: Greenwood Press; 1971: 49-58.
- 14) Mechikoff, Robert A. *A History and Philosophy of Sport and Physical Education: From Ancient Civilizations to the Modern World*. 8th ed. New York: McGraw Hill LLC; 2024: 154-76.
- 15) Hackensmith, C. W.: *History of Physical Education*. New York: Harper & Row, 1966: 96-108. Rice, Emmett A., John L. Hutchinson, Mabel Lee.: *A Brief History of Physical Education*. 5th ed. New York: The Ronald Press Company; 1969: 53-55. 今村嘉雄：西洋体育史上, 戦後体育基本資料集, 第17巻, 木下秀明監修, 大空社, 東京, 1996: 42-48.
- 16) Van Dalen, Deobold B., and Bruce L. Bennett.: *A World History of Physical Education: Cultural, Philosophical, Comparative*. 2nd ed. New Jersey: Prentice Hall, Inc.; 1971: 162-68. Zeigler, Earle F. *History of Physical Education and Sport*. Revised ed. Illinois: Stipes Publishing Company; 1988: 92-93.
- 17) 中村敏雄：スポーツと教育 スポーツを考えるシリーズ3, 大修館書店, 東京, 1978: 28-48.
- 18) Lieb, Michael.: "The Sinews of Ulysses": Exercise and Education in Milton. *The Journal of General Education*. 1985; 36(4): 249.
- 19) プラトン：法律(下), 森進一・池田美恵・加来彰俊訳, 岩波書店, 東京, 2017: 39-42, 76-82. プラトン：国家(上), 藤沢令夫訳, 岩波書店, 東京, 2022: 247-51. アリストテレス：政治学(下), 三浦洋訳, 光文社, 東京, 2023: 366-70.

John Miltonの*Of Education*におけるキリスト教的体育思想（後編）On the Christian Thought of Physical Education
in *Of Education* by John Milton桶田 由衣^aYui Oketa^a

2. 古典的教育観とキリスト教的教育観の融合—

*Of Education*の理想の教育目標

体育史研究で*Of Education*について言及するときは、古代ギリシアのスパルタにおける実践的な軍事教練について焦点が当てられていた。その一方で、聖書や神、キリストといったキリスト教を想起させる内容については、従来あまり言及されていなかった¹。そこで、体育史研究で論じられない*Of Education*で言及されるキリスト教的要素に焦点を当て、Miltonがギリシアに代表される古典的要素だけに依拠するのではなく、真のキリスト教徒を養成する教育を理想としていたことについて述べる。

まずは、体育史研究で多く引用されるMiltonの主張する教育の目標について確認しようⁱⁱ。“I call therefore a compleat and generous Education that which fits a man to perform justly, skilfully and magnanimously all the offices both private and publick of Peace and War.” (*Of Education* 280, vol. 4) 平時であれ、戦時であれ、公的、私的であっても、職務をやりとげる人間を訓練するという実践的な教育が主張されていることは、多くのMilton研究者からも指摘されている³。さらに、*Of Education*の“Exercise”の項目において、Miltonはこの定義を再度体育に即して次のように言及する。“... whereas that City [the Common-wealth of Sparta] train'd up their Youth most for War, and these in their

Academies and *Lycæum*, all for the Gown, this institution of breeding which I here delineate, shall be equally good both for Peace and War.” (*Of Education* 287-88, vol. 4 括弧は論者による) スパルタにおける戦時に向けた軍事教練やAristotleが開いた学園リュケイオンなどにおける平時の教育を意識しつつも、自身の教育機関は、平時にも戦時にも有用であると言い、ギリシア的な要素を取り入れつつ、独自の教育機関を主張している。Miltonが殊更に軍事教練を体育に取り入れた背景として、*Of Education*を出版した1644年が、ピューリタン革命の内乱の最中であったことから、Miltonの脳裏に軍事的な発想があったとされる⁴。確かに、Miltonが*Of Education*において掲げる理想の体育として、古典的すなわちギリシア的な要素を含んでいる。そのため、上記の二つの引用からでは、キリスト教に関連する内容を窺うことができず、Miltonはむしろギリシア的な要素のみを重要視しているように思われる。そこで、体育史研究において引用、言及されないMiltonの主張する学問の目的について取り上げたい。次の引用は、私市・黒田⁵が、本作における最も有名な一節だと評するほど、*Of Education*について言及する際には必出の箇所であるⁱⁱⁱ。“The end then of Learning is to repair the ruines of our first Parents by regaining to know God aright, and out of that knowledge to love him, to imitate him, to be like him, as we may the nearest by possessing out souls of true vertue, which

^a 日本大学スポーツ科学部

College of Sports Sciences, Nihon University

i Van Dalen and Bennett, McIntosh, Brailsfordはキリスト教に関連する事柄について言及してはいたものの、*Of Education*から具体的な引用をしていない¹。

ii 当該箇所を引用していた文献は次の引証資料を参照のこと²。

iii Milton研究で次の引用文を引用している文献は、次の引証資料の通り⁶。体育史研究からは、杉本政繁⁷のみが言及しているが、具体的な検証や分析には至っていない。

being united to the heavenly grace of faith makes up the highest perfection.” (*Of Education* 277, vol. 4) 学問の目的は、神を再び正しく知ることができるようになって、始祖たるアダムとイヴが犯した墮罪を回復することである。これは、宗教的すなわちキリスト教的な目標で、かつ先に挙げた教育目標の基礎となると指摘されている⁹⁾。そしてMiltonは次のように続ける。“But because our understanding cannot in this body find it self but on sensible things, nor arrive so clearly to the knowledge of God and things invisible, as by orderly conning over the visible and inferior creature, the same method is necessarily to be follow’d in all discreet teaching.” (*Of Education* 277, vol. 4) 我々の理解力は、目に見えるものにしか及ばないため、まずは目に見えるものから順序正しく学ぶことでしか、神と目に見えない事からを知る知識に到達できないという。それゆえ、真の宗教的な教育目標を到達するために、表2のような段階でMiltonのカリキュラムが展開されるのである^{iv)}。

体育においては、軍事教練といった具体的で実践的なものが、“visible”な教育として展開されていると考えられる。こうした理解可能な段階的な目標を達成することで、キリスト教の神の知識を習得した理想のキリスト教徒となる。つまり、“the end of Learning”は、先に挙げた平時でも戦時でも適用できる教育の目標と併せて言及しなければ、Miltonのカリキュラムは完成しないのである。Miltonが意図する目標は、職務をやり遂げるといった古典的要素を下敷きとした“visible”な教育目標と、“the end of Learning”に表される真のキリスト教徒となるための目標が融合することであると言える^{v)}。

3. 「精神的強さ」と「忍耐」—Miltonの考える理想のキリスト教徒

本章においては、体育史研究でこれまで示されていないMiltonが体育を重視していた理由について説明

表2 *Of Education* のカリキュラム

第一段階 ・ラテン語文法 ・教育の本を読むこと(美德と真の鍛錬を愛するために) ・算術 ・夕食後から就寝までは、聖書物語でキリスト教の教育
第二段階 ・農業、地理、ギリシア語、幾何学や天文学等、数学、建築学や航海術等、気象学や動植物学等、医学の入門、詩の鑑賞
第三段階 ・倫理学、家政、政治学、法律学、歴史学、叙事詩、悲劇
第四段階 ・論理学、修辞法、詩学、詩作など
体育
※昼食前の約一時間半前を体育やその後の休息に充てる (1) 武器(剣)の正確な使い方(防衛・攻撃方法) (2) レスリングの組手 ※合間や食事前に音楽を聴いて、気持ちを落ち着かせる (3) 夕食の2時間前ほど前まで学習し、突然の合図で軍事教練に召集 ※最初は徒歩、次第に騎馬や騎兵の技術を習得 (4) 行軍、築城などの技術の習得 →結果、国に奉仕できる指揮官となりうる ※以上の体育のほかに、2, 3年して基礎固めができたなら、案内人同伴で馬に乗って遠出し、有名な場所、建物、耕作地、港などを見学し、航海や海戦の実施の知見を得る。23, 24歳頃に海外へ ※食事は、外食はなるべくせず、質素で適度なものにすること

する。前述のように、*Of Education* における体育思想の特徴は、「軍事教練」、「スパルタ式の兵士養成」のための教育であることは明らかである。次の引用において、Miltonが理想とする運動について述べられているが、ここからも古典の知識をただ模倣しているわけではなく、Miltonの理想とするキリスト教徒像が読み取れる。

The Exercise which I commend first, is the exact use of their Weapon, to guard and to strike safely

iv 表2は、次の引証資料を一部参考にして作成した⁹⁾。

v 二つの目標が融合しないしは補完し合うという指摘については次の引証資料を参照されたい¹⁰⁾。特に晩年の作品において、Miltonはギリシア・ローマの知識の習得のみに偏ることへの批判をし、それを下敷きにした上で、聖書やキリスト教に関する知識を獲得する必要があると主張するようになる¹¹⁾。具体例として、Miltonの晩年の叙事詩*Paradise Regained* (1671)において、キリストの敵である墮天使サタンが、キリスト教のことには一切言及せず、ギリシア・ローマの雄弁術を学ぶべきとキリストを誘惑している場面が挙げられる。

with edge, or point; this will keep them healthy, nimble, strong, and well in breath, is also the likeliest means to make them grow large and tall, and to inspire them with a gallant and fearless courage, which being temper'd with seasonable Lectures and Precepts to them of true *Fortitude* and *Patience*, will turn into a native and heroick valour, and make them hate the cowardise of doing wrong. (*Of Education* 288, vol. 4 斜字体は論者による)

Miltonのいう“exercise”は、武器の正確な使い方について理解することが第一で、これによって、健康で強靱な状態を保ち、体格良く、長身になり、そして恐れず、勇敢になるという。そして、真の“fortitude”[精神的強さ]と“patience”[忍耐]を、時宜を得て訓戒し、教化することで調和させるならば、生来の英雄的な勇気となると述べ、健康や体力だけでなく、精神面の向上も期待できるというのである。当該箇所は、従来の体育史研究において最も引用および言及されている箇所ではあるものの、斜字体の箇所については、体育史研究において省略されるか、引用されたとしても、分析対象にならない^{vi}。斜字体で示した“fortitude”と“patience”という語は、Miltonにとっては、キリスト教徒として持つべき重要な徳として述べられる。例えば、Dorian¹³⁾は、*Of Education*の当該箇所の注釈として、Miltonが*Of Education*以後の作品においても、“patience”が最も高い忍耐を示すことを繰り返し述べていると説明し、その具体例として、叙事詩*Paradise Lost* (1667)と劇詩*Samson Agonistes* (1671)を列挙している^{vii}。両作品は、誘惑に屈せず、逆境にも耐える強さを持つべきであると謡う作品であり、Miltonが1640年代にすでにそうした意識があったことが窺える。さらに、Miltonが自らの神学体系を論じたとされる*Christian Doctrine*において、“fortitude”と“patience”は次のように定義づけられている^{viii}。“FORTITUDE is chiefly conspicuous in repelling evil, or in

regarding its approach with equanimity. ... The great pattern of fortitude is our Savior Jesus Christ, throughout the whole of his life, and in his death.” (*Christian Doctrine* 247, 249, vol. 17) “PATIENCE consists in the endurance of misfortunes and injuries.” (*Christian Doctrine* 253, vol. 17) “fortitude”は、悪や誘惑に耐え、抵抗する際に行使することであり、一方、“patience”は逆境や不当な扱いに耐えることと定義づけられている。特に注目すべきは、“fortitude”を備えた人物の例としてイエス・キリストを挙げている点である。これらを*Of Education*に適用して考えると、Miltonは、体育でもってキリストのような誘惑や逆境にも耐えられる精神的な強さを養成させることができるというのである。体育によってMiltonが特に重んじていた“fortitude”と“patience”が涵養されるということは、Miltonがいかに体育を重視していたかを窺い知ることができる。

結論

従来の文学研究において、*Of Education*で言及される体育について扱われることは少なく、体育史の中でのMiltonについて論じられる機会も稀少であった。一方、体育史研究において、Miltonの*Of Education*は多く取り上げられ、Miltonが体育に寄与したことが示されていた。しかしながら、体育史研究においては、*Of Education*の実用的な側面を取り上げることが多く、文学研究で必ず言及する本作品におけるキリスト教徒としての学問の目的について、ほぼ言及されなかった。また、運動によってMiltonの考える重要な徳“fortitude”と“patience”を備えたキリスト教徒を育成できると本作品において主張されていた点についても、指摘されることが少なかった。以上のことから、体育史研究においては、本作品のキリスト教に関する事項が述べられていないことが明らかとなった。ギリシアにおける軍事教練に代表される実用的な教育のみを取り上げることは、Miltonの本意ではない。Milton

vi 次の引証資料は、当該箇所を引用していたものの、斜字体の箇所は全て省略されていた¹²⁾。左記以外の今回の検証対象の資料には引用されていなかった。

vii Miltonが晩年の作品において“patience”を重視していることについては、次の引証資料でも指摘されている¹⁴⁾。

viii *Christian Doctrine*はMilton死後の1823年に発見され、1650年代後半に制作された可能性があるという¹⁵⁾。本作品は、ラテン語で執筆されているため、引用は*The Works of John Milton*の英訳を用いた。

が重視したのは、体育も含めた具体的な教育を実施し、その目標を段階的に達成することで真のキリスト教徒となることであった。そのため、Miltonが意図する理想の体育思想を理解するためには、体育史研究だけでなく、文学研究による補完が必要になると言える。

引証資料

- 1) Van Dalen, Deobold B., and Bruce L. Bennett.: *A World History of Physical Education: Cultural, Philosophical, Comparative*. 2nd ed. New Jersey: Prentice Hall, Inc.; 1971: 164. McIntosh, P. C.: *Sport in Society*. London: C. A. Watts & Co. Ltd; 1971: 43. Brailsford, Dennis.: *Sport and Society: Elizabeth to Anne*. London: Routledge & Kegan Paul; 2010: 97.
- 2) Rice, Emmett A., John L. Hutchinson, Mabel Lee.: *A Brief History of Physical Education*. 5th ed. New York: The Ronald Press Company; 1969: 54. Van Dalen, Deobold B., and Bruce L. Bennett.: *A World History of Physical Education: Cultural, Philosophical, Comparative*. 2nd ed. New Jersey: Prentice Hall, Inc.; 1971: 164. Leonard, Fred Eugene, and George B. Affleck.: *A Guide to the History of Physical Education*. Connecticut: Greenwood Press; 1971: 57. Brailsford, Dennis.: *Sport and Society: Elizabeth to Anne*. London: Routledge & Kegan Paul; 2010: 95.
- 3) Hillway, Tyrus.: Milton's Theory Of Education. *College English*. 1944; 5(7): 376. McGuire, Maryann Cale. *Milton's Puritan Masque*. University Of Georgia Press; 1983: 47. Schuler, Stephen J.: Sanctification in Milton's Academy: Reassessing the Purposes in *Of Education* and the Pedagogy of *Paradise Lost*. *Milton Quarterly*. 2009; 43(1): 39, 41. <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/epdf/10.1111/j.1094-348X.2009.00209.x>. June 1. 2022.
- 4) ミルトン, ジョン: 教育論, 私市元宏・黒田健二郎訳, 未来社, 東京, 1984: 68-69. Brailsford, Dennis.: *Sport and Society: Elizabeth to Anne*. London: Routledge & Kegan Paul; 2010: 96-97.
- 5) ミルトン, ジョン: 教育論, 私市元宏・黒田健二郎訳, 未来社, 東京, 1984: 34.
- 6) Hillway, Tyrus.: Milton's Theory Of Education. *College English*. 1944; 5(7): 376. Lieb, Michael. "The Sinews of Ulysses": Exercise and Education in Milton. *The Journal of General Education*. 1985; 36(4): 247. Schuler, Stephen J.: Sanctification in Milton's Academy: Reassessing the Purposes in *Of Education* and the Pedagogy of *Paradise Lost*. *Milton Quarterly*, 2009; 43(1): 39, 41. <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/epdf/10.1111/j.1094-348X.2009.00209.x>. June 1. 2022.
- 7) 杉本政繁: ミルトンの体育思想—“Of Education”(1644)に見るルネサンス期の体育—, 大阪体育大学紀要, 2005, 36: 3.
- 8) Milton, John.: *Of Education*. Preface and Notes by Donald C. Dorian. *Complete Prose Works of John Milton*, general editor, Don M. Wolfe, vol. II, New Haven: Yale UP; 1959: 366. ミルトン, ジョン: 教育論, 私市元宏・黒田健二郎訳, 未来社, 東京, 1984: 34.
- 9) 梅根悟: 西洋教育思想史1: 紳士教育論の時代, 誠文堂新光社, 東京, 1968: 264. 中村敏雄: スポーツと教育 スポーツを考えるシリーズ3, 大修館書店, 東京, 1978: 41.
- 10) Ainsworth, Oliver Morely.: *Milton on Education*. New Haven: Yale UP; 1928: 42-43. Milton, John.: *Areopagitica and Of Education: With Autobiographical Passages from Other Prose Works*. Edited by George H. Sabine. New York: Appleton-Century-Crofts, Inc.; 1951: vii. 杉本誠: ミルトンの教育観, 城西大学女子短期大学部紀要, 1986, 3(1): 26. https://libir.josai.ac.jp/il/user_contents/02/G0000284repository/pdf/JOS-KJ00000589161.pdf. October 22. 2023.
- 11) Samuel, Irene. Milton on Learning and Wisdom. *PMLA*. 1949; 64(4): 708-23. Koslow, Julian.: "Not a Bow for Every Man to Shoot": Milton's *Of Education*, between Hartlib and Humanism. *Milton Studies*. 2008; 47: 24. 野村宗央: *Paradise Regained*における“the true orator”の役割, 英文学論叢, 2010, 58: 15-29.
- 12) Hackensmith, C. W.: *History of Physical Education*.

- New York: Harper & Row; 1966: 100. Rice, Emmett A., John L. Hutchinson, Mabel Lee.: *A Brief History of Physical Education*. 5th ed. New York: The Ronald Press Company; 1969: 54-55. Van Dalen, Deobold B., and Bruce L. Bennett.: *A World History of Physical Education: Cultural, Philosophical, Comparative*. 2nd ed. New Jersey: Prentice Hall, Inc.; 1971: 162-68. Leonard, Fred Eugene, and George B. Afleck.: *A Guide to the History of Physical Education*. Connecticut: Greenwood Press; 1971: 57.
- 13) Milton, John.: *Of Education*. Preface and Notes by Donald C. Dorian. *Complete Prose Works of John Milton*, general editor, Don M. Wolfe, vol. II, New Haven: Yale UP; 1959: 409.
- 14) 新井明：ミルトン，清水書院，東京，1997：23, 96-97. 杉本誠：ミルトンの倫理観，城西大学女子短期大学部紀要，1(1)，1984，15.
https://libir.josai.ac.jp/il/user_contents/02/G0000284repository/pdf/JOS-KJ00000589005.pdf. November 9. 2023.
- 15) 新井明：ミルトン，清水書院，東京，1997：180.

令和4年度海外派遣研究員(短期B)報告

ーフィリピンの英語教育に関する調査ー

Overseas Research Report on English Language Education in the Philippines

秋葉 倫史^a

Tomofumi Akiha^a

Key words: Philippines, Hawaii, English Language School, Pidgin English

フィリピン・ハワイ・語学学校・ピジン英語

1. はじめに

英語学習は近年さらに重視されており、特に、話す・聞くといったコミュニケーション能力を向上させることが英語教育において非常に重要な課題となっている。語学留学は、実際の英語に触れられるため、コミュニケーション能力向上のための有用な学習形式の一つであると考えられている。語学留学先の中でも、フィリピン(セブ)留学は、立地や費用等の観点から、日本人の語学留学先として注目されている。

本稿は日本大学令和4年度海外派遣研究員(短期B)についての報告をするものであり、上記の背景から「フィリピンの英語教育に関する調査」をテーマとして、現地語学学校の実態、留学傾向の調査及び現地英語の特徴(特に言語変化の観点から)を調査した。また、フィリピンと他の地域の英語教育と比較するために、フィリピンと同様に多民族を背景とした英語使用が確認されるハワイを対象として関連施設を訪問した。派遣期間を通して、施設の視察・見学、関係者からの聞き取り、資料の閲覧・講読を中心にフィールドワークを実施した。

2. 派遣概要

2.1. 派遣先・期間

訪問地：フィリピン(セブ)・

アメリカ合衆国(ハワイ)

期間：全体： 令和5年2月22日(水)～
3月23日(木)

セブ： 令和5年2月22日(水)～
3月15日(水)

ハワイ： 令和5年3月15日(水)～
3月23日(木)

2.2. フィリピン英語研究の背景と派遣研究の目的

本研究課題「フィリピンの英語教育に関する調査」には、(i)フィリピンにおける英語教育の実態と留学先としてのフィリピンの可能性、(ii)フィリピン英語の言語的特徴、といった2つのテーマを下位区分として設定している。これらの先行研究として、(i)について、研修報告として教育の実態を記述した渡辺・羽井佐(2014)¹⁾では、フィリピンの語学学校の認知度や市場規模を前提に、現地語学学校の形態、カリキュラム、施設、教師について述べている。本研究では、渡辺らとは異なる施設を調査し実態の調査を

^a 日本大学スポーツ科学部
College of Sports Sciences, Nihon University

行った。また、フィリピンの留学の傾向については、渡辺・羽井佐(2014)¹⁾のように、フィリピン留学の認知度について触れられてはいるもの、留学の国際ハブとしてのフィリピンの実態・役割の研究については詳細になされていない。そのため、本研究ではセブにおける留学生について、セブの語学学校を選択した理由やセブと他の留学地の関連性といった留学傾向の調査を行った。なお、本多・鈴木(2007, 2009)²⁾³⁾では、ハワイにおけるピジン言語化された英語使用が論じられている。本派遣期間においても、フィリピンと同様に通時的に他言語接触の背景を持つハワイを対象とし、現地ローカル言語と英語の関連性、留学地としての特徴及びセブ留学との関連性も調査した。(ii)については、フィリピン語・タガログ語と英語の使用について調査した中原(2006)⁴⁾や、フィリピン英語と標準英語を比較し、語彙や文法の相違点を指摘した本多・鈴木(2009)³⁾、語彙的(認知意味論的)観点からの特徴について論じた三宅(2003)⁵⁾等があげられるが、これらにおいては、言語変化の観点からの特徴については十分に説明されていないため、本研究では、フィリピン英語における母語の影響及び言語変化の外的要因について検討することとした。

上記のように本研究課題に関する先行研究は複数みられるが、さらなる議論が求められる分野である。詳細な調査を長期的な目標とし、本派遣期間は、その基礎調査として、関連施設の視察、現地及び現地大学・図書館等での文献・資料購読及び収集を主として実施した。教育機関や該当者からの聞き取りを基に、フィリピン語学留学の実態と留学傾向を明らかにすること、また、現地の母語を背景とした特に文法レベルでの言語の特徴を記述し、先行研究で述べられる説明を現地の資料において確認することと新たな事実・観点を発見することをねらいとしている。

3. 視察・訪問先

3.1. SMEAGセブ校

今回の派遣の主たる視察先であるSMEAGセブ校に訪問した。こちらは著者の勤務校において外国人教師派遣の業務委託契約をしている株式会社アチーブゴール社がセブにおいて経営する語学学校となっており、現地コーディネーターのフクシマ氏よりカリキュラ

ム・施設等の案内を受けた。立地は、セブの行政機関が集まる中心地から近く、大規模ショッピングモールであるアヤラ・センター・セブも移動圏内となっている。訪問当時は、250名程度の学生が在籍しており、おおよその国籍分布は日本40%、韓国20%、中国15%、台湾5%、ベトナム5%、その他15%ということであった。カリキュラムとしては、セブの主流のスパルタスタイルで、早朝から夜まで、マンツーマンを中心とした(科目によっては少人数のグループワーク)授業が実施され、受講生個人の目標を達成する形で展開されていた。なお、目標到達度の測定については、主としてケンブリッジ英語検定が使用されていた。見学した授業では、アカデミックライティングが行われていたが、受講生・教師ともかなりの予習量があることが伺い知れ、添削においても複数のパターンが提示され、またその用法に関するディスカッションも高いレベルにて実施されていたのが印象的であった。



写真1 SMEAGセブ校：講師研修の様子
(2023年3月9日、筆者撮影)

ム・施設等の案内を受けた。立地は、セブの行政機関が集まる中心地から近く、大規模ショッピングモールであるアヤラ・センター・セブも移動圏内となっている。訪問当時は、250名程度の学生が在籍しており、おおよその国籍分布は日本40%、韓国20%、中国15%、台湾5%、ベトナム5%、その他15%ということであった。カリキュラムとしては、セブの主流のスパルタスタイルで、早朝から夜まで、マンツーマンを中心とした(科目によっては少人数のグループワーク)授業が実施され、受講生個人の目標を達成する形で展開されていた。なお、目標到達度の測定については、主としてケンブリッジ英語検定が使用されていた。見学した授業では、アカデミックライティングが行われていたが、受講生・教師ともかなりの予習量があることが伺い知れ、添削においても複数のパターンが提示され、またその用法に関するディスカッションも高いレベルにて実施されていたのが印象的であった。

も併設されており、生活全般には不自由しないようになっている。さらに、トレーニングルームやシアターといった、渡辺・羽井佐(2014)¹⁾らが指摘しているような、集中型学習に伴うストレスを軽減させるような娯楽施設も完備されている。なお、SMEAGの特色として、施設運営に関わる業務は基本的に外部委託しないことがあげられる。例えば、機材のメンテナンスや洗濯業務など専用の人員を確保して運営している。洗濯に関しては、洗濯籠に入れて自室の前に朝置いておけば、夕方には自室に届けられるというシステムである。この背景には、フィリピン独特の事情がかかわっており、外部業者に依頼した場合、対応に非常に時間を要することを要因としているとのことであるが、結果的に海外からの留学生においてはより快適な学習・生活空間の確保に繋がっている。

3.2. SMEAG ベイドリーム3校

SMEAG ベイドリーム3校はセブ校と同様にSMEAGの校舎の一つである。この校舎は、授業教室・宿泊施設の建物が現在建築中である。完成すると300人規模の留学生を収容できる予定である。先述したセブ校との棲み分けとして、この校舎はビジネス英語を中心に展開し、社会人や家族連れを生徒として想定しているとのことであった。関連施設として、レストラン部分は完成しており、訪問時においては一般に開放されていた。将来的には、広大な敷地内にマーケットなどの一般施設を設置し、また、ビーチにある船を用いて、セブで人気のアクティビティ等の業務も実施するといった、学校一帯を一つの街として完成することが想定されていた。



写真2 SMEAGセブ校：トレーニングルーム
(2023年3月9日、筆者撮影)



写真4 SMEAGベイドリーム3校：野外レストラン
(2023年3月10日、筆者撮影)



写真3 SMEAGセブ校：カフェテリア
(2023年3月9日、筆者撮影)



写真5 SMEAGベイドリーム3校：校舎建築中の様子
(2023年3月10日、筆者撮影)

3.3. QQ English ITパーク校

今回の派遣期間において、在籍した語学学校である。立地は海外の企業が集まるITパーク内に位置している。このエリアは、セブの中でも先進的な開発がなされた一角であり、インフラ等も新しく整備され、セブの中でも治安が良い地域である。多くの企業がオフィスを構え、ショッピングモール・ホテルをはじめとして、様々な施設がこの地域にまとまっているため、このエリアで生活が完結するようになっている。ITパーク校は、あるオフィスビルの複数フロアを使用している。そのため、SMEAG校や他の典型的なセブの語学学校とは異なり、宿泊施設を併設しているものの、提携したホテルなどから学校に通うなど、複数の選択肢がある。他の学校は施設内完結型であるが、ITパーク校は、エリア内完結型の学校といえる。

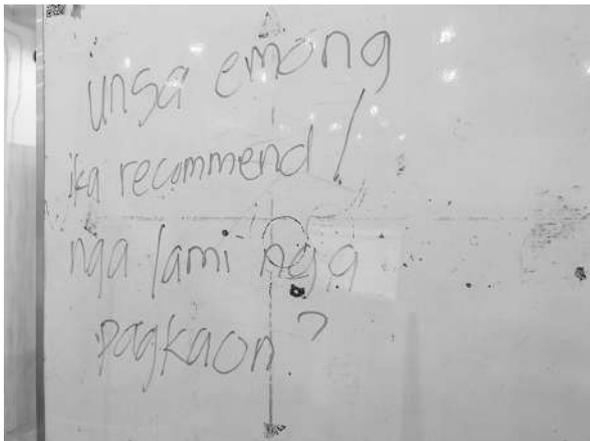


写真6 QQ English ITパーク校：英語とセブアノの混同によるヒアリング授業の板書
(2023年3月3日，筆者撮影)

授業を受ける個別ブースは400以上あり、そこで留学生に対する対面授業を実施するほか、世界中に向けてオンライン授業を配信する用途にも使用されている。パンデミック後の時期であったため、対面の留学生は200名程度とのことだが、コロナ以前はブースが埋まるほどの生徒数があったとのことである。留学生の割合は、日本企業のためであろうか日本人の割合が高い。ただ、他のフィリピンの語学学校と同様にマンツーマン授業のため、英語を話す時間は非常に多く確保できる。一方で、時代の変化に伴い、学生のスタイル・ニーズに合わせて個別に授業内容や時間割を選択できるカリキュラムとオンライン授業を併用することで帰国前後においても継続した内容を受講できるスタイルといった先行研究では説明されていない新たな知見も確認することができた。このようにセブの語学学校も近年多様化が進んでいることが確認できた。



写真8 QQ English ITパーク校：授業用ブース
(2023年3月1日，筆者撮影)



写真7 QQ English ITパーク校：併設ラウンジスペース
(2023年3月1日，筆者撮影)

3.4. セブにおけるその他の施設

セブにおいて複数の施設を訪れたが、本節ではそのうち顕著なものを紹介する。まず、現地の歴史的背景を知るために、サンカルロス大学と併設博物館及びスクボ博物館を訪問した。これは、言語変化の観点から言語を見るために、言語接触の外面史を探る目的があった。フィリピンは1500年代以降、スペインの侵略・統治があったため、まず現地語におけるスペイン語の影響が大きい。その後、近代においてアメリカの統治となり、英語が使用されるようになった。特にスクボ博物館では、それらの歴史的な変遷と複数の言語

資料を閲覧することができた。



写真9 サン・カルロス大学校舎内
(2023年2月27日, 筆者撮影)

現地英語の特徴に、母語がどのように影響しているかを知るために、まずは母語(セブアノ)の言語を検証する必要があった。セブアノについての文法書を探すため、セブシティ図書館を訪問した。そこで僅かな現地語の資料を閲覧することができた。しかし、セブアノ自体の体系的な文法書は見つけることができなかった。これは、母語の教育が十分でなかったことに起因している可能性はあるが、ヒアリングの結果から、フィリピンにおいては、近年母語教育の重要性の見直しがなされており、母語を扱う授業が展開されているとのことであった。今後、文法に関する教育資料を取集する予定である。



写真10 セブシティ図書館の様子
(2023年2月24日, 筆者撮影)

3.5. ハワイの訪問施設

ハワイにおいても、セブと同様の観点から施設を訪問した。まず、ハワイ大学マノア校及びその付属語学学校プログラムHawaii English Language Program (HELP) の施設を見学し、施設や留学生の様子の確認をおこなった。セブにおいては、マンツーマンが特色だが、こちらは少人数グループワークを中心としたカリキュラムであった。留学生の年齢層については社会人が少ないように見受けられ、セブとの相違が認められた。



写真11 ハワイ大学マノア校：語学学校HELP
(2023年3月16日, 筆者撮影)

また、ハワイにおいても、現地の人々の本来の母語であるハワイ語の特徴とその英語への影響、また言語変化に影響を及ぼす外的要因の調査として、図書館・博物館(ハワイ大学図書館、ハワイ州立図書館、ビショップミュージアム)を訪問した。現地図書館では、第一に、母語であるハワイ語について書かれた資料や物語等について、ハワイ語と標準英語が対照されている文献を中心に閲覧し、先行研究に沿ってハワイ語の特徴について確認した。この点において、ハワイは母語を重視する政策を実施しているため、セブよりも比較的多くの母語を説明する資料を見つけることができた。また、ピジン化されたハワイ英語の語彙や文法についての資料も閲覧することで、本多・鈴木(2007)²⁾で指摘されるハワイ英語の特徴の一部も確認することができた。博物館の訪問では、展示物・資料より、様々な言語を背景とするハワイへの移民の歴史や、アメリカによる統治、マイノリティ言語となった

ハワイ語の言語教育政策等といったハワイ英語のピジン化に関わる外面史についても触れることができた。

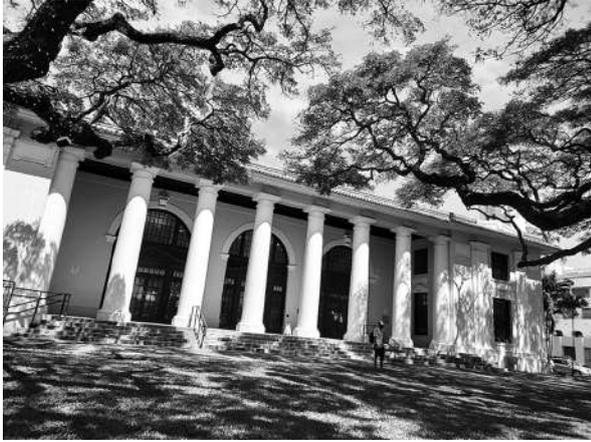


写真 12 ハワイ州立図書館
(2023年3月20日, 筆者撮影)

4. アンケート結果の概要

フィリピンの語学学校において、小規模であるがアンケートを実施した。対象者はSMEAG・QQ Englishの日本人留学生16名である。①本人の属性（学生、社会人等）、②海外・留学経験、③セブを選択した理由、④今後の留学、といった項目に沿って調査を行った。セブ留学の実態及び今後の留学についての調査結果の概要は、以下の通りである。

まず、セブが選ばれる理由として、「費用が安い」「距離が近い」「マンツーマンレッスンが魅力的」が上位となり、セブ留学の印象については、回答者全員が「非常に満足している」「満足している」という結果となった。今後の留学予定については9割弱が「予定（希望）あり」と回答している。その留学先としては、「北米」「カナダ」「オーストラリア」といった母語として英語を使用する国あるいは地域が上位に挙げられている。

セブが選ばれる要因としては、先行研究等で述べられる結果と同様であるが、全員の満足度が高いことが示されたため、限定的な範囲ではあるものの、セブ留

学の有用性があると認められる。また、セブ留学者が将来のさらなる留学を希望し、英語を母語とする留学先を候補としている点は、セブが留学の足掛け（国際ハブ）としての役割を果たしている可能性を示唆している。

5. おわりに

今回は基礎調査のため、視察・見学、資料収集が主となり、またアンケートも小規模であったが、現地資料の閲覧、教員・留学生のヒアリングから、様々な観点が得られた。今回新たに得た知見を活用し、今後は本研究をより詳細に調査する予定である。具体的な研究テーマは、「フィリピン英語へのセブアノ語の影響について」及び「セブの留学先の可能性について」であり、後者については現地語学学校と協力し、より大きな規模でのアンケート調査を検討している。

参考文献

- 1) 渡辺幸倫・羽井佐昭彦：フィリピン英語留学が言語態度に及ぼす影響：継時的インタビューを手掛かりに、相模女子大学文化研究, 32：47-66, 2014.
- 2) 本多吉彦・鈴木邦成：ハワイにおけるピジン英語の発達に見る日本の英語教育の可能性（Ⅲ）：ハワイ英語の文法体系を展望しながら、文化女子大学紀要, 15：65-74, 2007.
- 3) 本多吉彦・鈴木邦成：フィリピンにおける英語使用の現状：英語の国際化の流れを踏まえて、文化女子大学紀要, 17：119-127, 2009.
- 4) 中原功一郎：フィリピンにおける英語使用の現状と将来、日本実用英語学会論叢, 12：99-109, 2006.
- 5) 三宅ひろ子：アジアの「新英語」からみた言語意識教育の必要性—日本人大学生を対象としたフィリピン英語メタファー表現の理解度調査から—、アジア英語研究, 5：45-64, 2003.

令和4年度海外派遣研究員（短期B）報告

— 生成理論に基づくヒトの言語獲得・言語習得に関する研究 —

Overseas Research Report on A Generative Approach to Language Education

田中 竹史^a

Takeshi Tanaka^a

Key words: plurilingualism, multilingualism, CEFR, the Iberian Peninsula, cognitive science
 複言語主義, 多言語主義, CEFR, イベリア半島, 認知科学

1. 導入

Mora et al. (2011)¹⁾によると、地球上には真核生物が約874万種存在すると推計されている。それらの多様な生き物のうち、ヒト（ヒト科ヒト属）は唯一ことばの使用が可能な生物種であり、ことばはヒトという存在を際立って特徴づけている。松沢 (2011)²⁾が議論するように、たとえ進化の隣人であるチンパンジー（ヒト科パン属）のように学習能力が高く、様々な点でヒトに比肩し得る——のみならず記憶などある側面においては凌駕するような——認知能力を持つ生物種であっても、音声言語であれ手話言語であれ言語の使用は見られない¹⁾。また、川添 (2020)³⁾や酒井 (2022)⁴⁾などが説得的に示すように、ChatGPTを含むどんなに優れた人工知能 (AI: Artificial Intelligence) であってもヒトと同様に自然言語を理解することはかなわないⁱⁱ⁾。したがって、我々の高次脳機能の一つであることばを対象とした研究は、ヒトという生物種の特質を明らかにするのに最も有力な手段であり、とりわけ、

言語の獲得や習得に焦点を当てた研究は認知科学の領域において極めて重要な地位を占めているⁱⁱⁱ⁾。

本稿は上記のような背景を基に、日本大学令和4年度海外派遣研究員（短期B）の制度により実施された研究の報告を行うものである。

2. 研究概要

近年、欧州評議会 (Council of Europe) の言語教育政策である Common European Framework of Reference for Languages (CEFR)¹¹⁾をはじめとして外国語教育が大きな注目を浴びているが、日本における言語教育、特に英語教育に関わる社会一般の状況を鑑みるに、大津 (2022)¹²⁾や久保田 (2018)¹³⁾などが議論するような英語教育に関わる「誤解」や「幻想」が依然として根強く残っている^{iv)}。

- (1) 誤解 1 英語学習に英文法は不要である
- 誤解 2 英語学習は早く始めるほどよい
- 誤解 3 留学すれば英語は確実に身につく

^a 日本大学スポーツ科学部

College of Sports Sciences, Nihon University

i ただし松沢 (2011)²⁾によると、チンパンジーはヒトと異なる仕組みではあるものの、単語自体の習得は可能である。

ii 人工知能による自然言語処理については、瀬上 (2018)⁵⁾や酒井 (2019)⁶⁾も参照のこと。

iii 言語の獲得や習得に焦点を当てた研究には、単一言語使用環境における母語獲得、多言語使用環境における母語獲得、子供や大人による第二言語習得、手話言語の獲得・習得、失語などの言語障害、認知能力に機能不全のある障害者による獲得・習得などが含まれる。より詳しくはBoeckx (2006)⁷⁾、Crain & Lillo-Martin (1999)⁸⁾、Jackendoff (1994)⁹⁾、Pinker (1994)¹⁰⁾などを参照のこと。

iv 久保田 (2018: 4, 5)¹³⁾では、「幻想1 アメリカ・イギリス英語こそが正統な英語である」、「幻想2 ことばはネイティブスピーカーから学ぶのが一番だ」、「幻想3 英語のネイティブスピーカーは白人だ」、「幻想4 英語を学ぶことは欧米の社会や文化を知ることにつながる」、「幻想5 それぞれの国の文化や言語には独特さがある」、「幻想6 英語ができれば世界中だれとでも意思疎通できる」、「幻想7 英語力は社会的・経済的成功をもたらす」、「幻想8 英語学習は幼少期からできるだけ早く始めた方がよい」、「幻想9 英語は英語で学んだ方がよい」、「幻想10 英語を学習する目的は英語が使えるようになることだ」などが挙げられている。

- 誤解4 英語学習は母語を身につけるのと同じ手順で進めるのが効果的である
- 誤解5 英語はネイティブから習うのが効果的である
- 誤解6 英語は外国語の中でもとくに習得しやすい言語である
- 誤解7 英語学習には理想的な、万人に通用する科学的方法がある (大津 2022: iii)¹²⁾

これは認知科学や言語理論と言語教育が十分な連携を欠いているため、ことばに関わる広範な研究成果が教育の分野に適切に反映されていないことによるものであるように思われる^{v)}。

本研究では、CEFRによる複言語主義(plurilingualism)の実状確認と、Cook (2010)¹⁵⁾以降、外国語教育において大きな潮流となっている、外国語の学習には母語の活用が不可欠であり母語は外国語の学習を促進させる重要な資源であるという主張(大津・亘理 2021¹⁴⁾; 久保田 2018¹³⁾など)に検討を加えるため、(i) 欧州での二重公用語を含む多言語使用状況の確認、(ii) 欧州各国の言語政策の比較、(iii) 欧米における言語教育と日本の言語教育との比較、に関する基礎的な調査を実施した。

調査期間は2023年2月18日から同年3月24日までであり、調査実施の中心的な地域はイベリア半島の多言語国家であるスペイン王国、そしてポルトガル共和国とした^{vi)}。調査対象となる言語は、当該地域で使用されているカスティーリャ語(いわゆるスペイン語)や、カタルーニャ語、ガリシア語、アストゥリアス語、バレンシア語、アラゴン語、バスク語などスペインの諸言語、加えてポルトガル語などである^{vii)}。調査にあたっては、当該地域の大学や図書館、博物館・美術館などの公共施設を活用すると共に、日常生活の場である交通機関や各種商業施設などを通じて、多言語使用を含む日常の言語環境の在り様に関する資料および情報の収集を実施した。また、期間中に北米の多言語国家であるカナダに赴き、Canadian College of Eng-

lish Language (CCEL) の視察を行うと共に、Simon Fraser Universityで開催されたthe 30th Japanese/Korean Linguistics Conference (JK 30)に参加し、認知科学や言語学に関わる研究者と情報交換などの交流を進めた。

3. 研究結果

3.1. 各地域での言語使用の実態調査

2023年2月18日から同年3月23日にかけて、レオン、アストルガ、オビエド、セビーリャ、ウトレラ、メリダ、カセレス、バダホス、エヴォラ、ヴィラ・ヴィソサ、コインブラ、リスボン、バルセロナ、サラゴサ、テルエル、ウエスカ、アリカンテ、マドリードなどの各地域に赴き言語使用の実態調査を実施した。

この調査により、マドリード、バルセロナ、リスボンなどの都市部と同様にその他地域でも、ホテル、飲食店、店舗などの商業施設、大聖堂、聖堂、教会堂、修道院などの宗教関連施設、美術館・博物館や交通機関などの公共施設では、カスティーリャ語、ポルトガル語、イタリア語、英語、フランス語、ドイツ語など現地語を含む複数の言語による掲示が一般的であることを目の当たりにした(写真1)。



写真1 コインブラ：ポルトガル語、カスティーリャ語、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語での掲示 (2023年3月3日、筆者撮影)

これら欧州において話者人口の多い言語に加え、スペイン北部のピレネー山脈周辺に位置するバスク地方で

v 日本の学校英語教育に関する現状については、大津・亘理 (2022)¹⁴⁾を参照のこと。

vi スペインやポルトガルの言語・社会については、川上 (2009)¹⁶⁾および黒澤 (2009)¹⁷⁾を参照のこと。

vii 黒澤 (2009)¹⁷⁾によると、ポルトガルにおける少数言語には、リオドノール語(ブラガンサ郡)、グアドラミル語(ブラガンサ郡)、ミランダ語(ミランダ・ド・ドウロ郡)とその南方方言であるセンディン語などがある。

はバスク語とカスティーリャ語の併記, スペイン北部のビスケー湾に面するアストゥリアス地方ではカスティーリャ語とアストゥリアス語の併記(写真2), スペイン北東部の地中海に面するカタルーニャ地方ではカタルーニャ語とカスティーリャ語での表記が見られた(写真3).



写真2 オビエド: カスティーリャ語, アストゥリアス語, 英語での掲示
(2023年2月21日, 筆者撮影)



写真3 バルセロナ: カタルーニャ語, カスティーリャ語, 英語での掲示
(2023年3月15日, 筆者撮影)

このように, どの地域でも「スペインにおける様々な言語の織り成す様態の豊かさは, 特別な尊重と保護の対象となるべき文化的遺産である」とスペインの現行憲法第3条第3項(BOE: Agencia Estatal Boletín Oficial del Estado)で述べられている通り, 主流言語のみではなく少数言語にも価値を置くというという欧

州の独自性が認められた^{viii}.

(2) Constitución Española: Artículo 3

1. El castellano es la lengua española oficial del Estado. Todos los españoles tienen el deber de conocerla y el derecho a usarla.
2. Las demás lenguas españolas serán también oficiales en las respectivas Comunidades Autónomas de acuerdo con sus Estatutos.
3. La riqueza de las distintas modalidades lingüísticas de España es un patrimonio cultural que será objeto de especial respeto y protección.

上述のような複数言語使用の状況はそれを維持するために多大な経済的・人的コストを要するが, 欧州評議会は, (3)に示すように, 「言語は基本的人権の問題であって, 言語的な多様性は欧州の文化的な豊かさの象徴であり, これらの多様性は守り発展させるべき価値のあるものである」と考えている。

- (3) “[T]hat the rich heritage of diverse languages and cultures in Europe is a valuable common resource to be protected and developed, and that a major educational effort is needed to convert that diversity from a barrier to communication into a source of mutual enrichment and understanding; that it is only through a better knowledge of European modern languages that it will be possible to facilitate communication and interaction among Europeans of different mother tongues in order to promote European mobility, mutual understanding and co-operation, and overcome prejudice and discrimination;” (cf. CEFR 2001: 2)¹⁰

イベリア半島における現地調査で判明した言語に関わる社会的状況は, 英語のみを共通語とした単一言語主義(monolingualism)を否定し多言語主義(multilingualism)を掲げる欧州評議会の, 各言語間の翻訳・通

viii 川上(2009)¹⁰によると, スペイン国内で自治州の公用語, あるいは保護・振興の対象となっている言語には, カタルーニャ語(カタルーニャ州, バレアレス諸島州), アラン語(カタルーニャ州), バレンシア語(バレンシア州), バスク語(バスク州, ナバラ州), ガリシア語(ガリシア州), アストゥリアス語(アストゥリアス州), アラゴン語(アラゴン州)などがある。

訳に莫大な予算を確保している言語政策における価値観と一致し、言語に関わるコストは社会的に必要なコストであると見なされていることの一部が伺えた。

3.2. Canadian College of English Languageでの視察

2023年3月9日に、バンクーバーに校舎を持つCanadian College of English Language (CCEL) の視察を行い、Marketing DirectorであるOhori Akie氏に聞き取り調査を実施した^{ix}。Ohori氏によると、バンクーバーは移民や留学生が多く多様な人種が生活している町であるために、英語を学習するには最適な地であるとのことであった。この言葉の通り、市内各所では中国系、日系、韓国系などの飲食店、食料品店、医療施設などが見られ、査証免除条件などの制度的な背景と合わせて、小島 (2008)¹⁸⁾ が「日本人のカナダ留学の増大」により「日本人の留学生の割合が高い学校が多く、日本人は非常に重要な地位を占めている」と報告するような、バンクーバーという都市への日本人留学生の多さが伺えた。CCELの在籍学生の出身国は、日本約30%、南米約30%強、中国や韓国などその他40%という構成であり、年齢層、入学経緯、在籍期間、その後の進路なども多様とのことであった^x。また当該校では、各国からの留学生を受け入れるため、学習者の既得言語を母語とする担当者（たとえば、日本語については2名の日本人）を常駐させ、学生からの履修相談や生活相談など各種相談に対応しているということである。実際の授業は、講義中心であれ（写真4）、ペアワークなど作業中心であれ（写真5）、いずれも少人数での実施であった。

近年の外国語教育では、Cook (2010)¹⁵⁾ やButzkamm (2001)¹⁹⁾ などが議論するように、目標言語一辺倒の単一言語主義による教授法の弱さが指摘されている。この種の教授法の弱さを乗り越える Translation in Language Teaching (TILT) や複言語主義などの新たなアプローチでは、(4) から (6) に示すように、外国語の学習には学習者の母語の活用が不可欠であり、母語



写真4 CCEL：授業風景
(2023年3月9日、筆者撮影)



写真5 CCEL：授業風景
(2023年3月9日、筆者撮影)

は外国語の学習を促進させる重要な資源であると考えられている。

- (4) “Humans teach and learn by moving from the familiar to the unfamiliar, by building new knowledge onto existing knowledge. Language learning and teaching are no exception to this general rule. Translation is just such a bridge between the familiar and the unfamiliar, the known and the unknown. To burn the bridge or to pretend that it does not exist, hinders rather than helps the difficult transition which is the aim of language teaching and learning. Learners moreover

ix CCELで提供されているプログラムは、Smrt English (ESL), Business English, IELTS Preparation, English for Academic Purposes (EAP) & University Pathway, Canadian College Pathwayなどである。

x 進路としては、帰国、就業、Canadian CollageやSt. Lawrence Collegeなど関連大学やその他大学への進学などがあげられる。

need that bridge to maintain the link between their languages and identities. They should never be forced to leave everything behind them, simply because they are speaking another language.”

(Cook 2010: 155)¹⁵⁾

- (5) “Anyone who has tried to learn an unfamiliar language will be easily convinced of the great advantage of mirroring structure in the native language. However, in many school books we find no trace of this highly effective instructional strategy.” (Butzkamm 2001: 154)¹⁹⁾

- (6) “Let us set out from our deeply ingrained knowledge of the L1, and the inevitable existence of transfer and interference, and use them as a psychological given. We need not deny the fact that the learner uses the L1 for a reference; on this basis we can help learners gradually develop a new L2 reference system, pointing out where the two languages are alike and where they are different.” (Stern 1992: 284)²⁰⁾

このような母語活用の重要性は授業内に限られるのではなく、Brook-Lewis (2009)²¹⁾が議論するように、授業外でも定期的に学習者の母語を使用した生活相談の時間を確保したり授業内容についての質問の時間を設けたりすることが、学習者の心理的負担を軽減させ安心感を与えるなど、学習の効果をより高め促進させると考えられている。CCELにおける学習者への授業外対応はこの潮流と一致しており、外国語教育に関する最新の知見を教育現場で積極的に実践するという姿勢が認められた。

3.3. The 30th Japanese/Korean Linguisticsへの参加

2023年3月10日から3日間にわたり、Simon Fraser Universityのバンクーバーキャンパスで開催されたthe 30th Japanese/Korean Linguistics (JK 30)に参加した。期間中は4つの講演、25の口頭発表(写真6)、40のポスター発表が実施され(写真7)、いずれも世界各国からの参加者により活発な質疑応答が行われた。



写真6 Simon Fraser University :
JK 30での口頭発表の様子
(2023年3月12日、筆者撮影)



写真7 Simon Fraser University :
JK 30でのポスター発表の様子
(2023年3月13日、筆者撮影)

数多くの発表の中でも、特に自身の研究課題と関連する発表を行った研究者とは個別に議論や意見交換の機会を持った。中でも、高橋光子(長岡技術科学大学)、小林茂之(聖学院大学)、田中裕幸(関西学院大学)、Yong-Taek Kim (Georgia Institute of Technology)、Subin Park (Seoul National University)などの各氏とは、生成理論における格の認可と外項の併合・移動についての技術的な詳細(A Bottom-Up View of Nominative-Genitive Conversion in Japanese)、語彙の歴史的発達の中での意味の漂白化と変化の一様性(Historical Changes of the Old Japanese Adverb “*Kamahete*”), 言語間の普遍性と個別性(Inverse construction as a solution to the mismatch between perception and cognition)、個別言語に内在する構造的な曖昧性(The ambiguity of *tasi* ‘again’ in Korean: a structural approach)

などについて有意義な情報共有が達成された。

3.4. サラゴサ在住日本語教師への聞き取り調査

2023年3月17日に、サラゴサ在住の池田訓子氏に聞き取り調査を実施した。池田氏は2003年から約20年にわたりスペインを活動拠点としており、現在はスペインでの日本語教育に関わる大学教員や語学学校教員など教育関係者による団体であるスペイン日本語教師会 (APJE: Asociacion de Profesores de Japones en Espana) に所属している。同氏からは、サラゴサなどアラゴン地方での言語教育、バスク地方での言語政策、カスティーリャ語のアラゴン方言などスペインで使用されている言語と言語教育、カスティーリャ語とカタルーニャ地方で使用されているカタルーニャ語との関係、そしてスペインの文化・社会などについての貴重な情報が得られた。

CEFRの複言語主義との関連では、バスク地方における言語政策が大変興味深い。池田氏によると、バスク地方では自治体が言語の保護政策に力を注いでいるため、たとえば、公務員などの採用試験はバスク語で実施されているとのことであった^{xi}。このような自治体における取り組みは、言語と文化の保全という側面において積極的に評価されるべきである^{xii}。しかし、池田氏によると、カスティーリャ語を母語とする他地域出身者は、この制度は言語的な障壁であり公平性の点で問題があると考えており、バスク地方に対して異文化圏という感覚を抱いている者も多いということであった。複言語主義の観点からすると、コスト共有化のためにカスティーリャ語の話者もバスク語を身に付ける努力をすることが望ましい^{xiii}。しかし現実的にそのような状況となっていない点は、社会の中で言語が占める地位の大きさに比してCEFRの掲げる複言語主義の理想が十分に浸透してはいないことを示している。このような言語をめぐる社会的状況は、言語

知識が現在最新のAIであっても太刀打ちできないほど極めて複雑な体系である点を考慮すると、CEFRの示す言語政策を十分に推し進めるためには、主流言語の話者が少数言語を学習することに対する動機付けに課題が残されているように思われる。

4. まとめ

本研究は2節「研究概要」で示すように、欧州における言語使用状況の確認とイベリア半島での言語政策を主眼とした調査、あわせて最新の言語理論についての知見を得ることであった。前述の通り、言語環境に関する調査では、マドリード、バルセロナ、リスボンなどの都市部ばかりでなくオビエド、ヴィラ・ヴィソサ、ウトレラなどの地方に赴き、それらの地域の商業施設、交通機関、公共施設、宗教施設などを通じて言語環境に関わる資料および情報の収集を行った。この調査の結果、CEFRの提唱する言語政策の柱である複言語主義は、欧州における言語環境がその形成に大きな影響を与えていることは伺えるものの、全ての地域が一様に多言語の環境ではない点が確認された。言語政策に関しては、特にバスク地方などの言語保全を積極的に進める政策は、周辺地域との社会的な軋轢も引き起こしかねないという負の側面も判明した。言語教育に関しては、バンクーバーやサラゴサにおいて視察や聞き取り調査を実施し、学習対象の言語ばかりでなく学習者の既得言語である母語も重視した近年主流となっているアプローチの具体的な実践を目の当たりにした。また、JK 30への参加は、項の生起位置や格の認可メカニズムなどの最新の生成理論における知見を得る機会となった。

xi このような言語保全の試みは、バスクのみではなくスペインの他の地域でもなされている。たとえば川上 (2009)¹⁶⁾によると、カタルーニャでは2006年の自治憲章により、カタルーニャ語が行政及び公的メディアにおける通常的で優先的な使用言語であること、同様に、教育における伝達手段や学習言語としても通常使用される言語であることが規定されている。また、ポルトガルでは、黒澤 (2009)¹⁶⁾が述べるように、ミランダ語を地域の文化財及び伝達やアイデンティティ強化の手段として振興する目的で、1998年にミランダ言語法 (全国法) が制定された。この法律は、子供がミランダ語を学ぶ権利、ミランダ・ド・ドウロ郡の公式機関がポルトガル語にミランダ語訳を付して文書を発行する権利、ミランダ語やミランダ文化の教員養成を振興する権利を定めたものである。

xii 言語と文化の保全については、Margaret (2011)²²⁾のKenneth L. Haleの項目を参照のこと。

xiii 主流言語のみによる単一言語主義の社会的問題点については、西山 (2011)²³⁾を参照のこと。

参考文献

-
- 1) Mora, C., Tittensor, D., Adl, S., Simpson, A., Worm, B.: How Many Species Are There on Earth and in the Ocean? *PLoS Biology*, 2011; 9: 1-8.
- 2) 松沢哲郎：想像するちから—チンパンジーが教えてくれた人間の心。岩波書店，東京，2011
- 3) 川添愛：ヒトの言葉 機械の言葉「人工知能と話す」以前の言語学。角川書店，東京，2020
- 4) 酒井邦嘉：脳とAI 言語と思考へのアプローチ。中央公論新社，東京，2022
- 5) 瀬上和典：機械翻訳の限界と人間による翻訳の可能性，*AGLOS: Journal of Area-Based Global Studies*, 2018; 1-23
- 6) 酒井邦嘉：チョムスキーと言語脳科学。集英社，東京，2019
- 7) Boeckx, C: *Linguistic Minimalism: Origins, Concepts, Methods, and Aims*. Oxford U.P., Oxford, 2006
- 8) Crain, S., Lillo-Martin, D.: *An Introduction to Linguistic Theory and Language Acquisition*. Blackwell, Oxford, 1999
- 9) Jackendoff, R.: *Patterns in the Mind: Language and Human Nature*. Basic Books, New York, 1994
- 10) Pinker, S.: *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*. Harper Collins, New York, 1994
- 11) Council of Europe: *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge U.P., Cambridge, 2001
- 12) 大津由紀雄：ワイド新版 英語学習7つの誤解。ひつじ書房，東京，2022
- 13) 久保田竜子：英語教育幻想。筑摩書房，東京，2018
- 14) 大津由紀雄，亙理陽一：どうする，小学校英語？狂騒曲のあとさき。慶應義塾大学出版会，東京，2021
- 15) Cook, G.: *Translation in Language Teaching: An Argument for Reassessment*. Oxford U.P., Oxford, 2010
- 16) 川上茂信：スペインにおける言語状況と言語教育，平成18-20年度科学研究費補助金「拡大EU諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」研究成果報告書，2009，211-224
- 17) 黒澤直俊：ポルトガル共和国の言語状況と北東端地域における少数言語の存在，平成18-20年度科学研究費補助金「拡大EU諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」研究成果報告書，2009，225-244.
- 18) 小島大輔：バンクーバーにおける日本人語学留学の特徴，日本地理学会発表要旨集，2008
- 19) Butzkamm, W.: Learning the language of loved ones: on the generative principle and the technique of mirroring, *ELT Journal*, 2001; 55: 149-154
- 20) Stern, H. H.: *Issues and Options in Language Teaching*. Oxford U.P., Oxford, 1992
- 21) Brook-Lewis, K.: Adult Learners' Perceptions of the Incorporation of their L1 in Foreign Language Teaching and Learning, *Applied Linguistics*, 2009; 30: 261-235
- 22) Thomas, M.: *Fifty Key Thinkers on Language and Linguistics*. Routledge, New York, 2011 (中島平三 総監訳：ことばの思想家50人—重要人物からみる言語学史—。朝倉書店，東京，2016)
- 23) 西山教行：外国語教育と複言語主義，*Forum of Language Instructors*, 2011; 5: 3-13

2023年度 組織名簿一覧

スポーツ科学研究所員名簿

益子 俊志 学部長・研究所長・教授
(コーチング学(ラグビー))

青山 亜紀 教授(トレーニング学)

上野 広治 教授(コーチング学(水泳))

大嶋 康弘 教授(スポーツマネジメント)

河合 一武 教授(体育方法(サッカー))

北田 典子 教授(武道学)

小松 泰喜 教授(スポーツリハビリテーション学)

清水 享 教授(中国少数民族の文化・社会・歴史)

種ヶ嶋尚志 教授(スポーツ心理学)

西川 大輔 教授(コーチング学(体操競技))

日吉 秀松 教授(政治学)

布袋屋 浩 教授(スポーツ医学)

森丘 保典 教授(コーチング学)

森長 正樹 教授(コーチング学(陸上競技))

山崎真紀子 教授(日本近代文学)

山本 大 教授(コーチング学(サッカー))

秋葉 倫史 准教授(英語学(英語史))

近藤 克之 准教授(アダプテッド・スポーツ科学)

澤野 大地 准教授(コーチング学(陸上競技))

辰田和佳子 准教授(実践栄養学)

田中 竹史 准教授(言語学(英語学))

谷口 郁生 准教授(情報教育)

本道 慎吾 准教授(スポーツバイオメカニクス)

松尾絵梨子 准教授(運動生理学)

上原 優香 専任講師(コーチング学(柔道))

梅下 新介 専任講師(英語)

加藤 幸真 専任講師(スポーツ社会学)

小泉 夏子 専任講師(日本近現代文学)

田中 光輝 専任講師(武道学)

原 怜来 専任講師(スポーツバイオメカニクス)

宮内 育大 専任講師(スポーツ運動学)

桶田 由衣 助教(イギリス文学)

研究倫理審査委員名簿

布袋屋 浩 委員長・教授
森丘 保典 副委員長・教授
上野 幸彦 委員・教授
永沼 淳子 委員・教授
上野山晃弘 委員・専任講師
大嶋 康弘 委員・教授
小松 泰喜 委員・教授
山崎真紀子 委員・教授
谷口 郁生 委員・准教授
若鍋 昌史 委員・管理マネジメント課課長

日本大学スポーツサポートシステムスタッフ名簿

布袋屋 浩	教授	メディカルサポート	メディカルチェック
小松 泰喜	教授	メディカルサポート	メディカルケア
本道 慎吾	准教授	身体機能評価分析	画像、映像解析
宮内 育大	専任講師	身体機能評価分析	画像、映像解析
種ヶ嶋尚志	教授	心理サポート	メンタルトレーニング
上野 広治	教授	心理サポート	アスリートコンサルテーション
北田 典子	教授	心理サポート	アスリートコンサルテーション
西川 大輔	教授	心理サポート	アスリートコンサルテーション
森長 正樹	教授	心理サポート	アスリートコンサルテーション
澤野 大地	准教授	心理サポート	アスリートコンサルテーション
辰田和佳子	准教授	栄養サポート	栄養サポート
松尾絵梨子	准教授	栄養サポート	コンディショニング

2023年度 研究活動実施報告

青山 亜紀

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・日本陸上競技学会第22回大会，2024年2月22日～2024年2月23日，中京大学
- ・日本コーチング学会第35回大会，2024年3月2日～2024年3月3日，朝日大学

学会の役職・活動状況

- ・日本陸上競技学会・理事，企画広報委員長・2023年4月1日～2026年3月31日
- ・日本コーチング学会・理事・2023年4月1日～2025年3月31日

競技団体の役職・帯同等

- ・公益財団法人日本陸上競技連合・調査研究委員

上野 広治

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

- ・日本大学大学院総合社会情報研究科・教授・コーチング学特講，特別研究

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・XIVth International Symposium on Biomechanics and Medicine in Swimming，2023年9月6日～2023年9月9日，Leipzig University
- ・日本コーチング学会，第35回学会大会，2024年3月2日～2024年3月3日，朝日大学

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・アプライドスポーツサイエンス，「競泳選手がオープンウォータースイミングトレーニングを導入した際に得られる効果の可能性について」，第2巻，35-43，2023年4月，査読有
- ・アプライドスポーツサイエンス，「大学水泳競技部におけるチームワークの実態調査」，第3巻，印刷中，2024年3月発刊予定，査読有

競技団体の役職・帯同等

- ・公益財団法人日本水泳連盟・顧問
- ・公益財団法人東京都水泳協会・副会長

大嶋 康弘

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

- ・甲南大学・ゲスト講師・スポーツと経済（スポーツ競技団体の経営について）

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・第32回スポーツ産業学会大会，2023年7月22日～2023年7月23日，山梨学院大学

政府その他の委員会委員

- ・スポーツ庁令和5年度「誰もが気軽にスポーツに楽しめる場づくり総合推進事業・オープンスペース等の活用に関する検討会」・学識有識者・2023年8月1日～2024年3月31日

競技団体の役職・帯同等

- ・一般財団法人東京マラソン財団・アシスタントレースディレクター・2023年7月1日～2024年3月31日
- ・公益財団法人東京陸上競技協会・マーケティング企画委員・2023年6月1日～2024年5月31日

河合 一武

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・Neuroscience Research 「Transsynaptic activation of human lumbar spinal motoneurons by transvertebral magnetic stimulation」 7 1025869 (2023) 査読有. URL: sciencedirect.com/science/article/pii/S0168010223001918

北田 典子

臨床活動，各種計測会・トレーニング指導など

- ・バディスポーツ幼稚園・柔道部・師範

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・第31回体力・栄養・免疫学会大会，2023年8月19日～2023年8月20日，日本大学

学会の役職・活動状況

- ・体力・栄養・免疫学会・理事・2019年4月1日～現在
- ・体力・栄養・免疫学会・第31回大会実行委員会（大会副会長）・2023年8月19日～2023年8月20日
- ・日本スポーツ社会学会・第33回大会実行委員会（実行委員）・2024年3月16日～2024年3月17日

競技団体の役職・帯同等

- ・全日本柔道連盟・常務理事・2013年6月1日～2023年6月1日

小松 泰喜

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

- ・北海道科学大学・客員教授・中枢神経系理学療法学演習Ⅱ他
- ・工学院大学・先進工学部特別講師・メディカルエンジニアリング（機械理工学科3年）講義担当

公的研究費

- ・2021年度～2023年度，科研費基盤研究B，分担，「交代制勤務耐性に関わる生理学的基盤とその耐性の

増強可能性の解明」, (東京大学)

- ・2022年度～2024年度, 科研費基盤研究C, 分担, 「核磁気共鳴画像法 (MRI) を用いた日本人身体部分慣性特性標準データの確立」, (東京大学)

企業等との共同研究・受託研究

- ・受託研究, 2023年7月1日～2025年3月31日, 日本シグマックス株式会社, 「前十字靭帯再建手術患者を対象とした筋損傷に対する冷却効果に関する研究」

学会発表 (共同演者・座長含む)

- ・28th Annual Congress of the EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE, 2023年7月4日～2023年7月7日, Paris, France Hosted by: INSEP French Institute of Sport (e-poster: RELIABILITY OF COEFFICIENT OF DETERMINATION OF LINEAR REGRESSION MODEL BY ANGULAR VARIATION OF ACCELERATION DATA OF EACH PART OF THE BODY)
- ・28th Annual Congress of the EUROPEAN COLLEGE OF SPORT SCIENCE, 2023年7月4日～2023年7月7日, Paris, France Hosted by: INSEP French Institute of Sport, 共同演者 (ポスター) Pitch velocity and muscle activity during supra-maximal effort pitching in junior high school baseball players
- ・XXIX Congress of International/Japanese Society of Biomechanics ISB/ JSB2023 Fukuoka International Congress Center 30th July- 3rd August, 2023 Fukuoka, Japan, 共同演者 (ポスター) BIOMECHANICAL FACTORS AFFECTING LONG JUMP DISTANCE IN JAPANESE MALE UNIVERSITY ATHLETES)
- ・日本転倒予防学会第10回学術集会, 2023年10月7日～2023年10月8日, 京都テルサ, 会長: 金森雅夫 (羽衣国際大学人間生活学部 教授/立命館大学総合科学技術研究機構) 「パネルディスカッション」座長
- ・第11回日本運動器理学療法学会, 大会長: 建内宏重 (京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻), 2023年10月13日～2023年10月15日, 福岡国際会議場, 男子円盤投動作における最大捻転角度と最大振り切り速度の運動学的特性について
- ・第34回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 会長: 勝川忠憲 (慶応義塾大学スポーツ医学研究センター) 2023年11月11日～2023年11月12日, パシフィコ横浜ノース, 共同演者 (ポスター) 膝前十字靭帯損傷者の片脚跳躍着地時における運動力学的特徴について
- ・第34回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2023年11月11日～2023年11月12日, 共同演者 (ポスター) 膝前十字靭帯損傷者と健常者の台からの着地動作の運動学に関する検討
- ・第34回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2023年11月11日～2023年11月12日, 共同演者 (ポスター) 前十字靭帯損傷者と健常者の両足跳躍着地動作における膝関節外反角度の特徴
- ・第34回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2023年11月11日～2023年11月12日, 共同演者 (ポスター) 当院における脳振盪リハビリテーションの現状と課題
- ・第34回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 2023年11月11日～2023年11月12日, 共同演者 (ポスター) 市中のクリニックにおけるスポーツ関連脳震盪 (SRC) 診療に役割
- ・日本野球学会第1回大会 (旧名: 日本野球科学研究会), 2023年12月2日～2023年12月3日, びわこ成蹊スポーツ大学, 共同演者: マウンドの硬さが投球動作に与える影響

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・ Traumatic brain injuries caused by knockout in Japanese amateur boxers: A questionnaire-based survey, *Medicine* 102(44):p e35810, November 03, 2023. | DOI: 10.1097/MD.00000000000035810, 査読有
- ・ Association of breakfast skipping with habitual dietary intake and body mass index in female rotating shift workers. *Public health nutrition* 1-24, 2023年4月20日, 査読有
- ・ 日本臨床スポーツ医学会誌, 「ボクシング選手の外傷・障害に対する質問紙調査—男女選手間の検討—」, 31 (1), 153-161, 2023年1月, 査読有
- ・ 認知症と高照度光照射理学療法ジャーナル, 57 (8), 947-951, 2023-08, 医学書院, 2023年10月, 査読無
- ・ 日本神経回路学会誌, 巻頭言「身体運動のばらつき」, p- 2024, 印刷中, 査読無

学会の役職・活動状況

- ・ ISB/JSB 2023 福岡大会（国際バイオメカニクス学会）Scientific Committee 運営委員
- ・ 一般社団法人日本理学療法学会・研究安全・学術倫理審査委員会委員長・2022年6月25日～2024年6月定時総会終了
- ・ 日本スポーツ理学療法学会・評議員・2021年8月1日～2025年8月15日
- ・ 日本転倒予防学会・代議員・2022年4月1日～2023年3月31日
- ・ 公益財団法人身体教育医学研究所・客員研究部長・2022年4月1日～2023年3月31日
- ・ 日本転倒予防学会第10回学術集会・運営委員会委員・2022年4月1日～2023年10月9日

講演，その他

- ・ 第23回脳神経科学福岡セミナー，ニューロリハビリテーションへのいざない，2023年4月9日，主催：運動神経科学研究会，福岡大学（福大メディカルホール）
- ・ 第24回脳神経科学東京セミナー，ニューロリハビリテーションへのいざない，2023年9月3日，主催：運動神経科学研究会，日本大学三軒茶屋キャンパス
- ・ (公社) 埼玉県理学療法士会令和5年度後期研修会，「臨床研究を行う際に知っておくべき倫理指針について」，2023年9月19日，Zoom
- ・ 一般社団法人日本転倒予防学会，第10回学術集会特別講演（市民公開講座）テーマ「学校保健およびスポーツにおける危機管理」『脳神経科学と競技スポーツ』，2023年10月7日，京都テルサ，西館テルサホール

清水 享

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

- ・ 日本大学大学院総合社会情報研究科・教授・博士前期課程：アジア文化論特講・特別研究，博士後期課程：アジア文化特殊研究・特別研究指導
- ・ 明治大学商学部・兼任講師・中級中国語Ⅲ・Ⅳ

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・東アジア日本語教育・日本文化研究学会2023年度国際学術大会，2023年8月26日，日本大学通信教育部，「戦後における博多祇園山笠に関する学術論文と雑誌記事について」第4会場（71講堂）

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・スポーツ科学研究，「彝族の諺である「ルビ」収集資料について」，第8集，17p，2023年3月，査読有

種ヶ嶋 尚志

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・第89回日本応用心理学会大会発表，「競争心が大学生アスリートの心理的スキルに及ぼす影響」，2023年8月26日～2023年8月27日，亜細亜大学
- ・第3回日本アプライドスポーツ科学学会大会発表，「大学運動部活動における個人の性格特性と先輩後輩関係の関連性について」，2023年1月20日（オンライン開催），日本大学生物資源科学部

学会の役職・活動状況

- ・日本応用心理学会・理事・2021年4月1日～2023年3月31日
- ・日本応用心理学会・機関誌編集委員会委員・2021年4月1日～2023年3月31日

競技団体の役職・帯同等

- ・日本大学サッカー部・部長

西川 大輔

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・第3回日本アプライドスポーツ科学学会大会，2024年1月20日，オンライン開催（共同）

競技団体の役職・帯同等

- ・日本大学スポーツ競技部体操部コーチ・2003年4月1日～現在

講演，その他

- ・日本大学連携事業運動プログラム，2023年11月7日，21日，富里市教育委員会主催，富里南小学校

日吉 秀松

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

- ・日本大学大学院総合社会情報研究博士前期課程・教授・国際関係論特講

シンポジウム

- ・報告テーマ「西南連合大学の精神とスポーツ教育」，「International Conference of Sport, Leisure and Hospitality Management」，2023年5月20日～2023年5月21日，国立臺灣師範大学スポーツとリクリ

エーション学院主催, 国立臺灣師範大学

講演, その他

- ・暨南世界史先端フォーラム講演 (77) 「戦後日本土地改革と政治改革」, 2023年11月3日, 暨南大学文学学院歴史学科, 暨南大学
- ・暨南世界史先端フォーラム講演 (79) 「江戸の三行半と白蓮事件と中国の女性解放運動」, 2023年11月10日, 暨南大学文学学院歴史学科, 暨南大学
- ・暨南世界史先端フォーラム講演 (92) 「明治から1945年まで日本の対外移民政策と目的」, 2023年12月23日, 暨南大学文学学院歴史学科, online
- ・暨南世界史先端フォーラム講演 (93) 「21世紀日本の移民政策と現状」, 2023年12月29日, 暨南大学文学学院歴史学科, online

布袋屋 浩

臨床活動, 各種計測会・トレーニング指導など

- ・早稲田大学本庄高等学院スポーツ障害相談会・早稲田大学本庄高等学院・2023年12月11日

学会発表 (共同演者・座長含む)

- ・日本スポーツ整形外科学会2023, (筆頭) 「大学生バスケットボール選手における足関節捻挫歴調査」, 2023年6月29日～2023年7月1日, リーガロイヤルホテル広島

学会の役職・活動状況

- ・埼玉膝スポーツ医学研究会・幹事・2002年3月31日～
- ・埼玉県北部整形外科懇話会・世話人・2006年3月31日～
- ・日本レーザー治療学会・評議員・2008年3月31日～
- ・日本整形外科スポーツ医学会・代議員・2009年3月31日～

競技団体の役職・帯同等

- ・日本ゴルフツアー機構・指定医師・2000年2月～
- ・日本大学陸上競技部特別長距離部門部長・2019年1月～

益子 俊志

学会発表 (共同演者・座長含む)

- ・2023年運動休閒與餐旅管理國際學術研討會, 2023年5月20日～2023年5月21日, 台湾師範大学
- ・第31回体力・栄養・免疫学会大会, 2023年8月19日～2023年8月20日, 日本大学

学会の役職・活動状況

- ・体力・栄養・免疫学会・理事
- ・体力・栄養・免疫学会・第31回大会長・2023年8月19日～2023年8月20日

森丘 保典

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

- ・筑波大学大学院人間総合科学研究科・非常勤講師・「スポーツウエルネス学 学位プログラム」外部指導教員
- ・神奈川衛生学園専門学校・非常勤講師・「スポーツ組織のマネジメント」, 「コーチング学」集中授業担当

公的研究費

- ・2023年度～2025年度, 日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究C）, 代表, 「競技者育成システムおよび育成環境の最適化に向けた一流競技者の発達過程の縦断的検討」

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会, 「大学生を対象とした短距離伴走体験学習の実践と検証」(近藤克之, 森丘保典, 尾縣貢), 2023年9月1日, 同志社大学
- ・日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会, 「一般成人と体育・スポーツ系学部同窓生のPhysical literacyの違い」(松永美咲, 鈴木宏哉, 染谷由希, 河村剛光, 鄧鵬宇, 春日晃章, 青野博, 森丘保典, 伊藤静夫, 松尾哲矢, 岡出美則, 内藤久士), 2023年8月30日, 同志社大学
- ・28th Annual Congress of the European College of Sport Science 「A qualitative case study on expertise of sprint guide runner : consideration based on case of four athletes with severe visual impairment for over 20 years」(KONDO Katsuyuki, MORIOKA Yasunori, OGATA Mitsugi), ECSS Paris 2023-France

学術誌（投稿論文, 依頼原稿等）

- ・体育科教育, 「日本における競技者の育成とフィジカルリテラシー：日本陸上競技連盟・競技者育成指針の考え方を踏まえて」, 71巻9号, 38-41, 2023年9月, 査読無

政府その他の委員会委員

- ・スポーツ庁・全国体力・運動能力, 運動習慣等調査に関する有識者委員会委員・2023年7月～現在
- ・公益財団法人日本スポーツ協会・国民体育大会委員会委員（2019年7月17日～現在）, 身体リテラシー（Physical Literacy）評価尺度の開発研究班員（2021年4月1日～現在）, 幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム普及ワーキング班員（2017年6月1日～現在）, 体育・スポーツにおける暴力・虐待・差別等の人権侵害防止に関する調査研究班員（2022年4月1日～現在）
- ・独立行政法人日本スポーツ振興センター・日本アンチ・ドーピング規律パネル委員・2016年6月1日～現在
- ・公益財団法人埼玉県体育協会・彩の国スポーツ推進パートナー・2022年5月2日～現在
- ・長野県教育委員会・長野県競技力向上対策本部アドバイザー・2018年9月1日～現在

学会の役職・活動状況

- ・日本コーチング学会・理事, 広報・社会への情報発信委員長・2015年4月1日～現在

- ・日本陸上競技学会・理事・2002年10月1日～現在, 2023年4月より理事長
- ・日本スプリント学会・理事・2000年8月1日～現在

競技団体の役職・帯同等

- ・全日本柔道連盟・革新的パスウェイ特別委員会委員・2023年11月～現在
- ・公益財団法人日本オリンピック委員会・強化スタッフ・2011年4月～現在
- ・公益財団法人日本陸上競技連盟・指導者養成委員会ディレクター (2021年9月1日～現在), 科学委員会副委員長 (2015年6月1日～現在), 陸上競技研究紀要編集委員 (2012年7月1日～現在)

講演, その他

- ・アクティブ・チャイルド・プログラム (JSPO-ACP) 普及講習会, 2023年11月11日, 公益財団法人日本スポーツ協会, 岩手県営武道館
- ・世田谷区スポーツ・レクリエーション指導者制度 (スポ・レクネット) 「基礎講習会」, 2024年2月24日, 世田谷区スポーツ振興財団, 世田谷区立総合運動場 (陸上競技場多目的室)
- ・JAAF公認ジュニアコーチ養成講習会, 2023年11月23日, 公益財団法人日本陸上競技連盟, Japan Sports Olympic Square
- ・次世代を担う指導者育成研修会, 2023年12月1日, 大分県教育委員会, アートホテル大分

森長 正樹

教育活動 (三軒茶屋キャンパスを除く)

- ・日本大学工学部・非常勤講師・スポーツ I・II
- ・日本大学大学院総合社会情報研究科通信制大学院・博士前期課程

競技団体の役職・帯同等

- ・日本陸上競技連盟・跳躍ブロックディレクター・2023年4月1日～2025年3月31日
- ・関東学生連盟・強化副部長・2023年4月1日～2024年3月31日
- ・全日本学生陸上連合・跳躍強化部長・2023年4月1日～2024年3月31日
- ・アジア室内陸上競技選手権大会 (カザフスタン)・跳躍ブロックコーチ・2023年2月10日～2023年2月12日
- ・アジア陸上競技選手権大会 (バンコク)・跳躍ブロックコーチ・2023年7月12日～2023年7月16日
- ・世界陸上選手権大会 (ブタベスト)・跳躍ブロックコーチ・2023年8月11日～2023年8月13日
- ・アジア競技大会 (杭州)・跳躍ブロックコーチ・2023年9月23日～2023年10月5日

山崎 真紀子

教育活動 (三軒茶屋キャンパスを除く)

- ・日本大学大学院総合社会情報研究科 (専任)・教授・日本文化論特講 II, 特別研究 (ゼミ)
- ・専修大学文学部・兼任講師 (2023年度のみ)・日本文学研究 7, 日本文学研究 8, ゼミナール 3 (卒論指導含む)

公的研究費

- ・2019年度～2023年度，科研費基盤研究B，代表，「日中戦時下の中国語雑誌『女声』研究—フェミニスト作家田村俊子編集長の視点から」
- ・2023年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）学術図書，代表，『日中戦時下の中国語雑誌『女声』—フェミニスト田村俊子を中心に』（春風社，2023年12月25日）刊行，全364頁+42頁
- ・2021年度～2024年度，科研費基盤研究C，分担，「2021年～2024年 近代日中女性の「非体制の模索とジェンダー：竹中繁・月曜クラブ・一土会を中心に」，（京都産業大学）

学会誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・書評，武内佳代『クリアする現代文学—ケア・動物・語り—』，日本近代文学会『日本近代文学』109集，2023年11月，204-206

学会の役職・活動状況

- ・昭和文学会幹事・2017年4月1日～現在
- ・昭和文学会会務委員・2023年8月1日～現在
- ・日本近代文学会・2017年4月1日～現在

山本 大

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

- ・日本大学理工学部・非常勤講師・スポーツⅠ・Ⅱ・体育実技サッカー

競技団体の役職・帯同等

- ・埼玉県サッカー協会・指導者養成部会・サブチーフ・2023年4月1日～2024年3月31日
- ・埼玉県サッカー協会・U-12女子トレセン・リードコーチ・2023年4月1日～2024年3月31日

秋葉 倫史

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・スポーツ科学研究，「令和4年度海外派遣研究員（短期B）報告：フィリピンの英語教育に関する調査」，第8集，掲載予定，2024年3月，査読無
- ・英文学論叢，「動名詞の動詞的特徴における通時的変化」，第72巻，掲載予定，2024年3月，査読有

学会の役職・活動状況

- ・近代英語協会・事務局長・2023年10月1日～2027年9月30日

近藤 克之

臨床活動，各種計測会・トレーニング指導など

- ・東京都パラスポーツ次世代選手発掘プログラム・中野区立総合体育館・9月18日・パラ陸上担当
- ・東京都パラスポーツ次世代選手発掘プログラム・武蔵野の森総合スポーツプラザ・11月23日・パラ陸

上担当

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・ 28th Annual Congress of the European College of Sport Science, A qualitative case study on expertise of sprint guide runner : consideration based on case of four athletes with severe visual impairment for over 20 years, 2023年7月4日～2023年7月7日, Paris, FRANCE (Palais des congrès de Paris).
- ・ 第73回大会日本体育・スポーツ・健康学会, 大学生を対象とした短距離伴走体験学習の実践と検証, 2023年8月31日～2023年9月1日, 同志社大学
- ・ 第22回日本陸上競技学会大会, 多様な人々との協働を促す伴走プロジェクトの実践（発表予定）, 2024年2月22日～2024年2月23日, 中京大学
- ・ 第35回学会大会日本コーチング学会, 短距離走の伴走者育成プログラムの検討（発表予定）, 2024年3月2日～2024年3月3日, 朝日大学

学術誌（投稿論文, 依頼原稿等）

- ・ 大学地域連携学研究, 「大学の位置する地域における初級パラスポーツ指導員資格を有する大学生の活動経験に関する事例的分析」, 第3巻, 投稿中, 2024年3月発刊予定, 査読有

競技団体の役職・帯同等

- ・ 関東パラ陸上競技協会・常務理事・2023年5月19日～2025年5月18日

講演, その他

- ・ 日本大学ダイバーシティシンポジウム, 「アダプテッド・スポーツから考える多様性」, 2023年6月25日, 日本大学, 日本大学会館2階大講堂

その他（上記以外の研究活動）

- ・ 令和5年度都立特別支援学校における学校2020レガシー推進事業, 講師, 東京都立青鳥特別支援学校, 2023年11月27日～2023年12月4日
- ・ 令和4・5年度 東京都教育委員会 体育健康推進校 研究発表会, 講師, 東大和市立第四中学校, 2023年11月17日
- ・ 令和5年度 東大和市公立中学校教育委員会 保健体育部会 夏季研修会, 講師, 東大和市立第四中学校体育館, 2023年8月23日

澤野 大地

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

- ・ 横浜市希望ヶ丘中学校・特別授業講師・JOCオリンピック教室

臨床活動, 各種計測会・トレーニング指導など

- ・ 京都府中学校陸上教室合宿における講師・京都府立丹波自然公園・2023年7月30日～2023年8月1日

- ・台東区体育協会ジュニア育成地域推進事業「第12回ジュニア100m走講習・測定会」・台東リバーサイドスポーツセンター陸上競技場・2023年10月1日
- ・令和5年度オリンピック・パラリンピアン派遣事業・福岡県三潴高等学校・2023年11月12日
- ・陸上指導講師・東京都立八王子西特別支援学校・2023年12月9日
- ・山形県スポーツタレント発掘事業アカデミー事業第2回アスリートキャンプ・山形県総合運動公園・2023年12月16日
- ・ボウタカキャンプ2024・練習会講師・屋島レクザムフィールド・2024年2月24日～2024年2月25日

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・大学地域連携学会第3回大会，2023年10月21日，日本大学文理学部

競技団体の役職・帯同等

- ・日本オリンピック委員会・アスリート委員会選出委員選挙管理委員会委員・2023年9月14日～2025年6月

シンポジウム

- ・令和5年度全学FDシンポジウム，2023年10月14日，日本大学FD推進センター，日本大学会館

講演，その他

- ・山形県スポーツタレント発掘事業アカデミー事業第2回アスリートキャンプ知的プログラム「オリンピックから学ぶ～世界で戦うために～」，2023年12月16日，山形県スポーツタレント発掘事業実行委員会，山形県総合運動公園
- ・「ボウタカキャンプ2024」講習会講師・屋島レクザムフィールド・2024年2月24日～2024年2月25日

その他（上記以外の研究活動）

- ・「ゴールデングランプリ陸上2023」解説，2023年5月21日，日産スタジアム
- ・「世界陸上2023ブダペスト」解説，2023年8月17日～2023年8月29日，ハンガリー・ブダペスト
- ・令和5年度全学FDワークショップ，2023年8月30日～2023年8月31日，日本大学会館

辰田 和佳子

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

- ・盛岡大学・非常勤講師・運動・スポーツと栄養

公的研究費

- ・2020年度～2023年度，科研費基盤研究C，代表，「視覚障がい者の身体活動促進がもたらす社会参加の向上とQOLへの効果」

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・第25回健康支援学会学術大会，2024年3月2日～2024年3月3日，中京大学

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・日本健康教育学会誌，「成人視覚障害者を対象としたフォーカスグループインタビューから得られた身体活動実践の工夫と必要な支援」，31巻，3号，142-150，2023年8月，査読有

学会の役職・活動状況

- ・日本栄養改善学会・評議員・2022年11月1日～現在

講演，その他

- ・日本ボート協会公認コーチ講習会，2023年8月，公益社団法人日本ローイング協会
- ・クリーンスポーツ研修会・スポーツ栄養学の基礎，2023年12月23日，公益社団法人日本ローイング協会

田中 竹史

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

- ・日本大学文理学部
- ・武蔵野大学薬学部

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・スポーツ科学研究，「令和4年度海外派遣研究員（短期B）報告：生成理論に基づくヒトの言語獲得・言語習得に関する研究」，第8集，掲載予定，2024年3月，査読無

学会の役職・活動状況

- ・日本大学英文学会・常任委員・2023年4月～2025年3月

谷口 郁生

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・令和5年度私情協教育イノベーション大会，「学生の情報環境利用状況から考える授業コンテンツ」，2023年9月7日，オンライン（Zoom開催），私立大学情報教育協会

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・私情協教育イノベーション大会資料，「学生の情報環境利用状況から考える授業コンテンツ」，p.232，2023年9月，査読無

本道 慎吾

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会，2023年9月1日，同志社大学
- ・大学地域連携学会第3回大会，2023年10月21日，日本大学文理学部
- ・日本コーチング学会第35回大会，2024年3月3日，朝日大学

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・Sports Biomechanics, [Effects of hurdle height on lower limb joint kinematics and kinetics of male trainee sprinters during hurdle jumps], ahead of print, 2023, 査読有

学会の役職・活動状況

- ・日本コーチング学会・幹事・2023年4月1日～

松尾 絵梨子

公的研究費

- ・2022年度～2024年度，科研費基盤研究C，分担，「薬局における運動器障害の予防を目指した健康支援プログラムの開発と評価」，（日本大学）
- ・2022年度～2023年度，2022年度「牛乳製品健康科学」学術研究（指定研究），分担，「長年に継続して乳和食または和食を摂取した女子バレーボール競技者の体幹，下肢筋力，骨格筋，疲労感などに対する影響，介入研究」，（東京聖栄大学）

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・2023年運動休閒與餐旅管理國際學術研討會，2023年5月20日～2023年5月21日，台湾師範大学
- ・第31回体力・栄養・免疫学会大会，2023年8月19日～2023年8月20日，日本大学
- ・日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会，2023年8月30日～2023年9月1日，同志社大学
- ・第70回日本栄養改善学会学術総会，2023年9月1日～2023年9月3日，名古屋国際会議場
- ・2023 29th FAPA Congress，2023年10月24日～2023年10月28日，Taipei International Convention Center
- ・日本薬学会第144年会，2024年3月28日～2024年3月31日，パシフィコ横浜（予定）

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・BMC Sports Science, Medicine and Rehabilitation, [Pre-exercise isomaltulose intake affects carbohydrate oxidation reduction during endurance exercise and maximal power output in the subsequent Wingate test], Volume 15, article number 89, 24 July 2023, 査読有

学会の役職・活動状況

- ・日本体力医学会・評議員・2019年9月21日～現在
- ・体力・栄養・免疫学会・第31回大会実行委員・2023年8月19日～2023年8月20日
- ・日本スポーツ社会学会・第33回大会実行委員・2024年3月16日～2024年3月17日

上原 優香

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・第31回体力・栄養・免疫学会大会，2023年8月19日～2023年8月20日，日本大学

学術誌（投稿論文，依頼原稿等）

- ・日本レーザー治療学会誌，「大学女子駅伝選手における高知トレーニング後の低酸素室入室の効果について」，24巻1号数，69-74，2023年2月，査読有

学会の役職・活動状況

- ・体力・栄養・免疫学会，第31回大会実行委員会，2023年8月19日～2023年8月20日

シンポジウム

- ・関東近県女子柔道交流会，2023年10月9日，関東柔道連合会，講道館

梅下 新介

臨床活動，各種計測会・トレーニング指導など

- ・兵庫県競技力向上ボクシング指導者招聘事業・兵庫県西宮香風高等学校・2024年1月6日～2024年1月8日

競技団体の役職・帯同等

- ・公益社団法人日本ボクシング連盟・指導者育成委員会委員・令和4年9月1日～令和6年8月31日，強化委員会委員・令和4年9月1日～令和6年8月31日
- ・公益財団法人日本オリンピック委員会・ボクシング強化スタッフ（コーチング，情報・戦略）

その他（上記以外の研究活動）

- ・2023全日本ボクシング選手権大会兼世界最終予選日本代表決定戦・競技会委員・2023年11月23日～2023年11月26日

加藤 幸真

教育活動（三軒茶屋キャンパスを除く）

- ・日本大学芸術学部・兼任講師・健康・スポーツ科学

公的研究費

- ・2022年度～2023年度，「牛乳乳製品健康科学」学術研究(指定研究)，分担，「長期に継続して乳和食または和食を摂取した女子バレーボール競技者の体幹，下肢筋力，骨格筋，疲労感などに対する影響，介入研究」，（東京聖栄大学）

学会発表（共同演者・座長含む）

- ・2023年運動休閒與餐旅管理國際學術研討會，2023年5月20日～2023年5月21日，台湾師範大学
- ・第31回体力・栄養・免疫学会大会，2023年8月19日～2023年8月20日，日本大学
- ・第70回日本栄養改善学会学術総会，2023年9月1日～2023年9月3日，名古屋国際会議場
- ・2023 29th FAPA Congress，2023年10月24日～2023年10月28日，Taipei International Convention Center
- ・日本薬学会第144年会，2024年3月28日～2024年3月31日（予定），パシフィコ横浜

学会の役職・活動状況

- ・富士学会，評議員，2021年4月1日～2024年3月31日
- ・体力・栄養・免疫学会，第31回大会実行委員会(実行委員)，2023年8月19日～2023年8月20日
- ・日本スポーツ社会学会，第33回大会実行委員会(会場責任者)，2024年3月16日～2024年3月17日

小泉 夏子(徳永 夏子)

公的研究費

- ・2020年度～2023年度，科研費基盤研究C，分担，「日本的ファンシーをめぐる1970年代の女性文化再編の研究——サンリオ出版を中心に」，（慶應義塾大学）
- ・2020年度～2023年度，科研費若手研究，代表，「大正・昭和期における少女投稿雑誌の研究——『令女界』を中心として——」

学会の役職・活動状況

- ・日本文学協会・委員・2020年11月～現在

その他（上記以外の研究活動）

【著書】

- ・徳永夏子，2023年5月，「消費文化・装い」，180-191，『ジェンダー×小説』，飯田祐子・小平麻衣子編，255，ひつじ書房
- ・徳永夏子，2024年2月刊行予定「言葉を送ること，受け取ること——『詩とメルヘン』における共鳴の方法」，182-210，『サンリオ出版大全』，井原あや，尾崎名津子，小平麻衣子，徳永夏子編，407，慶應大学出版会

田中 光輝

臨床活動，各種計測会・トレーニング指導など

- ・地元相撲クラブ競技指導・酒田市相撲場・2023年8月12日14時・トレーニング指導（立ち合いの腰の位置を測定）

学会の役職・活動状況

- ・日本武道学会・委員・2023年4月1日～2024年3月31日

講演, その他

- ・相撲クラブ審判講習会, 2023年8月12日16時から, 酒田市相撲協会主催, ひらた生涯学習センター
- ・相撲クラブ審判講習会, 2023年9月2日16時から, 福島町相撲協会主催, 福島町福祉センター

原 怜来

公的研究費

- ・2023年度, 第45回(公財)石本記念デサントスポーツ科学振興財団・課題学術研究助成, 共同研究者, 「オープンウォータースイマーの皮膚温度感覚特性とウェットスーツ普及のための基礎的研究」, (新潟医療福祉大学)
- ・2023年10月～2024年9月, 公益財団法人 戸部眞紀財団 研究助成, 共同研究者, 「寒冷下スポーツの安全性を高める順化トレーニングと温度受容チャネルTRPM8の役割」, (新潟医療福祉大学)

学会発表(共同演者・座長含む)

- ・XIVth International Symposium on Biomechanics and Medicine in Swimming, 2023年9月6日～2023年9月9日, Leipzig University
- ・2023年次日本水泳・水中運動学会, 2023年10月7日～2023年10月8日, 九州共立大学
- ・日本アプライドスポーツ科学会第3回大会, 2024年1月20日, オンライン
- ・日本コーチング学会 第35回学会大会, 2024年3月2日～2024年3月3日, 朝日大学

学術誌(投稿論文, 依頼原稿等)

- ・アプライドスポーツサイエンス, 「競泳選手がオープンウォータースイミングトレーニングを導入した際に得られる効果の可能性について」, 第2巻, p.35-43, 2023年4月, 査読有
- ・International journal of sports physiology and performance, 「Thermal Sensation After the 10-km Open-Water Swimming in Cool Water Depends on the Skin's Thermal Sensitivity Rather Than Core Temperature」, 印刷中, 2023年10月受理, 査読有
- ・アプライドスポーツサイエンス, 「大学水泳競技部におけるチームワークの実態調査」, 第3巻, 印刷中, 2024年3月発刊予定, 査読有
- ・スポーツ科学研究, 「世界水泳選手権2023福岡大会・世界マスターズ水泳選手権2023九州大会報告」, 第8巻, 印刷中, 2024年3月発刊予定, 査読無
- ・SWIMMING MAGAZINE, 「オーシャンズカップ2023 パリ五輪を見すえ熱戦」, 第47巻8号, p.67, 2023年7月, 査読無
- ・月刊水泳, 「【OWS】世界水泳選手権2023 福岡大会」, 第566号, p.12, 2023年9月, 査読無
- ・SWIMMING MAGAZINE, 「OWS インカレ初開催」, 第47巻11号, p.59, 2023年10月, 査読無
- ・月刊水泳, 「【OWS】第99回日本選手権水泳競技大会」, p.10-11, 2024年1月発刊予定, 査読無

学会の役職・活動状況

- ・日本コーチング学会・幹事・2023年3月1日～現在

競技団体の役職・帯同等

- ・公益財団法人日本オリンピック委員会・強化スタッフ・2013年4月～現在
- ・公益財団法人日本水泳連盟科学委員会・委員・2013年6月～現在
- ・公益財団法人東京都水泳協会オープンウォータースイミング委員会・委員長・2016年6月～現在
- ・公益財団法人東京都水泳協会・理事・2018年6月～現在
- ・公益財団法人日本水泳連盟オープンウォータースイミング委員会・委員長・2021年6月～現在
- ・公益財団法人日本水泳連盟国際委員会・委員・2021年6月～現在
- ・公益財団法人日本水泳連盟アンチドーピング委員会・委員・2021年6月～現在
- ・世界水泳選手権2023・福岡大会・世界マスターズ水泳選手権2023九州大会競技運営スタッフ・2023年7月

講演, その他

- ・「世界水泳選手権2023福岡大会におけるテクニカルレポート」, 2023年度デベロップメントワークショップ, 2023年10月9日, 早稲田大学
- ・公益財団法人日本水泳連盟「公認水泳コーチ更新研修会 (OWSコーチ4)」, 講師, 2023年12月1日～2024年1月31日, オンライン

宮内 育大

臨床活動, 各種計測会・トレーニング指導など

- ・令和5年度日本陸連U-19中四国ジュニア強化研修合宿コーチ・広島県・2023年12月24日～2023年12月27日
- ・令和5年度高知県高体連陸上競技専門部強化研修合宿コーチ・高知県・2024年1月4日～2024年1月6日

学会発表 (共同演者・座長含む)

- ・日本体育・スポーツ・健康学会第73回大会, 2023年9月1日, 同志社大学
- ・日本ホスピタリティ・マネジメント学会関東・関西支部研究発表会, 2023年10月28日, 東海大学
- ・東京体育学会第14回学会大会, 2024年3月, 都内大学 (発表予定)

桶田 由衣

学会発表 (共同演者・座長含む)

- ・日本レジャー・レクリエーション学会第53回学会大会, 2023年11月24日～2023年11月26日, 立教大学

学会の役職・活動状況

- ・日本英語文化学会・理事・2023年4月1日～2025年3月31日
- ・日本ミルトン協会・会計・2023年4月1日～2025年3月31日

「スポーツ科学研究（スポーツ科学研究所紀要）」執筆要領

（第9集については原稿募集時期に周知致します）

1. 投稿資格

- ①投稿者は、研究紀要刊行年度に日本大学スポーツ科学部スポーツ科学研究所（以下「研究所」という）に在籍する所員、研究補助員及び研究員とする。
- ②過年度に研究所に在籍した所員や現所員から推薦を受けた者については、スポーツ科学部スポーツ科学研究所運営委員会（以下「委員会」という）の承認により、投稿者となることが可能である。
- ③他学部又は学外機関の研究者を代表執筆者とする原稿については、第1号に定める者を共同執筆者に含む場合に限り、委員会の承認により当該代表執筆者は投稿者となることができる。
- ④その他、投稿の申し出があり委員会が承認した者を投稿者となることができる。

2. 投稿原稿

- ①投稿原稿は、他誌等に未発表のものでなければならない。
- ②投稿原稿は、完全原稿でなければならない。
- ③投稿原稿の分量（図表・注記を含む）は、次のとおりとする。

「総説」, 「原著論文」	刷り上り12頁(9,600文字)以内
「研究資料」, 「実践報告」, 「事例報告」	刷り上り8頁(6,400文字)以内
- ④第3号の分量を大幅に超える場合や複数の号への分割掲載を希望する場合、また委員会が認めるその他の原稿については、委員会においてその取扱いを決定する。
- ⑤投稿者は、投稿原稿中に含まれる第三者の著作からの転載等について、その著作権上及びその他法令上の手続きが必要な場合には、投稿者があらかじめ当該手続きを行うものとする。それらについて問題が生じた場合には、投稿者がその責任を負うものとする。

3. 原稿の種類

①原稿の種類

投稿原稿の構成部門はスポーツ科学系論文（スポーツ科学部門）、一般教養系論文（一般教養部門）と2部門から構成する。

原稿の種類は、総説、原著論文、研究資料、実践報告、事例報告とし、総説、原著論文は刷り上り12頁以内、研究資料、実践報告、事例報告は8頁以内とする。

総説：特定の研究領域に関する主要な文献内容の総覧であり、その内容は特定の視点に基づく体系的なまとめを持つものとする【査読なし】。

原著論文：科学論文としての内容と体裁を整えており、新たな科学的な知見をもたらすものとする【査読あり】。

研究資料：調査や実験の結果を主体とした報告であり、スポーツ科学研究の発展または人文、社会科学および自然科学研究の発展に寄与する資料として価値が認められるものとする【査読あり】。

実践報告：現場からの貴重な情報を基にした研究で、指導法に関する実用的研究や、総合的に分析したものとする【査読なし】。

事例報告：特定の少数の事例を詳細に調査・研究し、その結果を報告することでスポーツ科学研究の発展または人文、社会科学および自然科学研究の発展に寄与できるものとする【査読なし】。

②抄録

「総説」と「原著論文」には抄録を付ける。本文が和文の場合は200 words程度の英文抄録を付ける。本文が英文の場合は300～400字程度の和文抄録と200 words程度の英文抄録を付ける。なお、本文が英文の場合は査読用に和訳を添える。この抄録には、原則として研究の目的、方法、結果、および結論などを簡潔に記述すること。

- 1) 英文抄録については、委員会の責任において一応の吟味をする。英文に明らかな誤りがある場合には、原意を損なわない範囲で修正することがある。
- 2) 英文抄録の作成にあたっては、特に次の点に留意すること。
 - ・日本国内で知られている固有名詞でも、海外の読者に知られていないようなものについては、簡単な説明を加えること。
 - ・段落の初めは半角5文字分空け、句読点としてのコンマ (,) およびピリオド (.) の後は1文字あけること。
 - ・省略記号としてのピリオド (.) の後はあけないこと。

③本文

本文は日本語の場合は原則的にひらがな現代かな遣いとし、「である調」を用い、常用漢字を使用する。外国語の場合は原語表記またはカタカナを用いる。アルファベット等の略称に関しても原語表記または訳語を表記する。また、句点（終止符）はピリオド (.)、読点（語句の切れ目）はコンマ (,) を用いる。脚注は頁ごとに付記する。原稿の全体あるいは一部を日本語以外の外国語で執筆した場合には、当該言語を母語とする者によるネイティブチェック（校閲）をあらかじめ受けることとする。

なお、原稿は本要領2-②で示したように完全原稿で提出する。

④図表（写真を含む）

原稿は、本誌に直接印刷できるように、文字や数字を鮮明に書く。原則として白黒印刷とし、カラー印刷を必要とする場合は筆者が実費負担とする。図表原稿は図表1式を別原稿とし、1頁に図表1枚を掲載する。また図表には通し番号とキャプションを記載する。キャプションの引用文献の記述も本文に準拠して記入する。本文中への挿入箇所は、本文中にそれぞれの番号を明記する。

なお、図表の注記は、各図表の下に記入し、符号は、上付ダガー (†, ††, †††) を用いることとし、統計学上の有意水準を示す場合のみアスタリスク (*, **, ***) を用いる。

⑤本文中での文献引用の方法

本文中で引用文献に言及した場合、文章の右肩か著者名の右肩に、末尾の引用文献に照応する番号を付ける。また、著者氏名は3名まで著者名を記載し、4名を越える著者名については、日本語論文は「他」、外国語論文は「et al.」とする。題名、雑誌名、西暦年号、巻数、初め及び終わりの頁、の順に記載する。

例) 遠藤ら¹⁾によれば

誌名の略記は、引用雑誌所載の略名を用いる。単行本の場合、著者名、書名（編著の場合は、論文名、書名、編者氏名）、版数、発行所、発行地、年次、引用頁の順に記す。

学会発表の抄録を引用するときは表題の最終に（会議録）、欧文発表の場合は（Abstract）とすること。その他、以下の例に従って誤りがないよう注意すること。文献規定が守られていない場合や引用の誤りがある場合は、採択されないことがある（例示参照）。

本文中に引用されていない文献は、文献表に記載しない。doiの記載を推奨する。

⑥文献リストの記載例

例)

雑誌から直接引用する場合、番号、著者名：論文表題、掲載雑誌、巻：頁（始頁－終頁）、西暦年数の順に記す。

- 1) 遠藤俊郎, 加戸隆司: バレーボール選手の心理的適性に関する研究－メタ分析の手法を用いた他種目競技者との比較－, バレーボール研究, 2004, 6 (1) : 7-14
- 2) 仲村隆三, 斉藤雄介: 臨床運動学. 第3版, 医学書院, 東京, 1990, 18-35
- 3) 小原謙一, 江口淳子, 石浦佑一, 他: 実験モデルによる安楽座位におけるずれ力推定値の妥当性の検証, 理学療法学, 2007, 34 (suppl) : 511

単行本から引用する場合、番号、著者または編者名、章名、書名（章名がある場合は書名をイタリック体にする）、版数（括弧に入れる）、編者名（章著者がある場合）、発行所、発行所の所在地、引用頁、西暦年数の順に記す。

- 4) 佐々木万丈: スポーツと子どものストレス, 最新スポーツ心理学－その軌跡と展望, 大修館書店, 東京, 56-67, 2004.

WEBから引用する場合

- 5) ABC 看護学会: ABC 看護学会投稿マニュアル, <http://www.abc.org/journal/manual.html>, 2003.1.23. (閲覧日を記す)

欧文の雑誌と単行本から引用する場合

- 6) Feigley, D. A.: Psychological burnout in high level athletes. *Physician and Sports medicine*.1984; 109(19): 12-10
- 7) Murray PR, Rosenthal KS, Kobayashi GS.: *Medical Microbiology*, 4thed.: StLouis Mosby; 2002.
- 8) Meltzer PS, Kallioniemi A, Trent JM.: Chromosome Alterations in Human Solid Tumors.: Vogelstein B, Kinzler KW, editors. *The Genetic Basis of Human Cancer*. In New York: McGraw-Hill; 2002: 93-113
- 9) Brandes AA, Taphoorn MJB, Eskens FALM, et al.: Temozolomide chemotherapy in recurrent oligodendroglioma. *Neurology* 2000; 54 (suppl3): A12. (Abstract)
- 10) Garrow A, Weinhouse G.: Anoxic brain injury: assessment and prognosis. In: *UpToDate Cardiovascular Medicine* [online]. <http://www.UpToDateInc.com>. February 22.2000.

4. 原稿規定

①用紙の設定と文体

原稿は、ワードプロセッサで作成し、A4判縦置き横書き、全角40字20行（英文綴りおよび数値は半角）で、上下左右に2～3cmの余白をとる。頁番号を下中央に記入し、通しの行番号も入れる。フォントの大きさは10.5ポイントとする。使用する言語は、日本語、英語のどちらかとする。フォントは、日本語の場合にはMS明朝またはMSゴシック、英語の場合にはTimes New Romanとする。

②提出方法

原稿（図表、写真を含む）の提出は、電子ファイル（MS-WordやPowerPointファイルなど）にして、投稿申込書を添えて、電子メールにて編集委員会（rmss.spo-edit@nihon-u.ac.jp）宛に送付する。提出する際の電子ファイル名は著者名と投稿原稿の種類を簡潔に記すこと。

図表600dpi以上（拡張子はjpeg・png・gif等一般的なもの）程度

写真600dpi～1200dpi（拡張子はjpeg・png・gif等一般的なもの）程度

③表紙

原稿の表紙（1枚目）には下記の事項を記入する。（2）（3）（4）（5）については和文と英文の両方を記入する。

- (1) 原稿の種類
- (2) 題目
- (3) 著者名
- (4) 所属機関名
- (5) 3～5語のキーワード
- (6) 連絡先（住所、電話番号、電子メールアドレスなど）
- (7) 原稿審査を希望する分野（複数可）

④題目

題目は、和文と英文ともに研究の内容を的確に表現しうるものであること。副題をつける場合には、コロン（:）を用い、主題に続ける。主題、副題ともに、英文タイトルの最初の単語は、品詞の種類にかかわらず第1文字を大文字にし、その他は、固有名詞など、特に必要な場合以外はすべて小文字とする。

⑤著者名、所属機関名

筆頭著者と共著者ともに、和文と英文にて正式名称を記入する。大学の場合は学部名を、大学院の場合には研究科名、公官庁や民間団体の場合は部課名まで記入する。

⑥キーワード

キーワードは、論文の内容や特色を的確に示し、検索に役立ち得るものとする。題目はそのまま検索の対象になるので、題目に含まれていないものをキーワードとして記入すること。和文と英文とも3～5語を記載する。本文が和文の場合、和文キーワードは本文の前、英文キーワードは英文抄録の末に記載する。本文が英文の場合、英文キーワードは本文の前、和文キーワードは和文抄録の末に記載する。

⑦連絡先

連絡先は、査読過程での諸連絡に用いる。緊急の際に確実に連絡することができる連絡先（電話番号、電子メールアドレス）を記入する。

5. 倫理審査

投稿原稿の作成に際して、その記載内容が倫理審査を必要とするものである場合は、事前に倫理審査委員会等の承認を受けているものとする。

人体ならびにヒト組織を対象とした科学研究を取り扱う論文では、その実験は1964年のヘルシンキ宣言 (<https://www.wma.net/what-we-do/medical-ethics/declaration-of-helsinki/>) で承認された倫理基準、または文部科学省・厚生労働省および経済産業省により制定された「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に従って実施されなければならない。当該研究がこれらのガイドラインに従って実施されたことを投稿論文内に明記し、さらに倫理委員会等が発行した承認書の承認番号を論文中に記載するものとする。

6. 利益相反

投稿原稿の作成に際して、本学の利益相反（COI）に関する指針に基づきその内容に影響を及ぼしうる資金提供、雇用関係、その他個人的な関係が明示されていなければならない。利益相反（COI: conflict of interest）の有

無にかかわらず明記するものとする。

7. 謝辞・付記

謝辞や付記は本文とは分け、それぞれ「謝辞」「付記」の見出し語を用いて記述する。

以 上

編集後記

痛ましい自然災害や事故・事件が続き、波乱の年明けとなりました。一方で、今年は第39回夏季オリンピック競技大会「パリ2024」(2024年7月26日から8月11日まで)が開催されます。すでに本学の学生アスリートは大会に向けての準備に余念がなく、なかでも水泳競技は、2月に開催される世界選手権(ドーハ)があり、3月の日本選手権で代表が決めます。また、バドミントン競技など、他の多くの競技でもオリンピック出場を目指しており、学生たちの活躍は誇らしい限りです。ちなみに「2020東京オリンピック・パラリンピック(学生6名、卒業生5名)」、「2022北京オリンピック・パラリンピック(学生4名、卒業生1名)」にも、本学から多くのオリンピックを輩出しています。

さて、巻頭言では、益子研究所長(学部長・教授)に「スポーツ科学の発展と期待される未来」についてご執筆いただきました。ご自身の経験も含め、スポーツ科学という広範な射程の学問領域のさらなる拡大と、領域・分野横断的な研究の未来に期待が込められたものとなっています。

本号には5名の所員から6編の投稿を頂きましたが、本誌は学術誌として若手研究者の発表の場として、国際誌や他誌への投稿の準備にも重要な役割を担っています。専門科目分野では、原所員(専任講師)の「世界水泳選手権2023福岡大会・世界マスターズ水泳選手権2023九州大会」に関する実践をご報告いただき、各大会での大会運営や試合管理などに必要なスポーツマネジメントに繋がる重要な知見が随所に垣間見られました。中でもウェアラブル端末を試着してレース管理をする海外選手の活躍や、気候変動に伴う大会運営の困難さなど、今後のオープンウォータースイミングの発展についての重要な示唆をいただきました。

また、総合教育科目の4名の所員からも、総説1編、原著論文2編(執筆者同)、実践報告2編の投稿をいただきました。清水所員(教授)による「彝族の諺である「ルビ」収集資料について」ですが、この彝族(イ族と読む)は、中国の少数民族のひとつであり、2010年の第6次全国人口普查統計では人口は8,714,393人と、中国政府が公認する56の民族の中で7番目に多い民族とされています。この部族の死生観と民族アイデンティティには独特のものがありますが、それを人類の創造的な文化活動の一つである競技スポーツと関連付けながら、新たな観点からスポーツ社会学の探求への期待と、文化、宗教、歴史、社会、文学、芸術、スポーツの整理分析を専門とする筆者の大変貴重な知見を総説としてご提示いただきました。

桶田所員(助教)は、「John Milton の*Of Education*におけるキリスト教的体育思想(前・後編)」を原著論文として発表していただきました。その他、「令和4年度海外派遣研究員」の報告として「フィリピンの英語教育に関する調査」を秋葉所員(准教授)に、「生成理論に基づくヒトの言語獲得・言語習得に関する研究」を田中所員(准教授)にご報告いただきました。この制度は、日本学術振興会などの海外特別研究員制度に倣った大学独自のプログラムとなっており、本学の学術の将来を担う国際的視野に富む有能な研究者を、養成・確保するための支援のひとつとして実施しているものです。学内向けの報告書ではあるものの、今後継続したプログラムとして他の所員が意欲的に応募することに期待します。

最後に、スポーツ科学部のカリキュラムは、「情熱・愛情」、さらに「形をもって形にこだわらず」を教育理念としています。本学アメリカンフットボール部の廃止(廃部)やラグビー部の組織・体質に関する事案等、競技スポーツの持つ本来の価値とは何かを、世論から批判として浴びせられています。競技スポーツの持つ価値を明確化し、「大学教育」と「競技スポーツ」の接点を議論すべきであり、そのことを世界水準にすることが選手強化の本質としながらも、その成果を追求することが第一優先です。そのため、スポーツ科学研究所所員は、さらに充実した研究環境を活用し、豊かな人間性を育てる教育理念に、そしてまた新たな教育環境と指導内容を提言できることが大切です。

このことを踏まえ、スポーツ科学に従事するすべての研究者にご高覧いただきたく、お願いする次第です。

第8集 スポーツ科学責任編集
小松 泰喜

スポーツ科学研究 第8集

編集 スポーツ科学研究所運営委員会

発行 日本大学スポーツ科学部スポーツ科学研究所

〒154-8513 東京都世田谷区下馬三丁目34番1号

TEL 03-6453-1600 (事務局代表)

FAX 03-6453-1630 (事務局代表)

2024年3月 発行

Journal of Sports Sciences

Vol.8

March 2024

Research Institute of Sports Sciences
College of sports sciences, Nihon University
